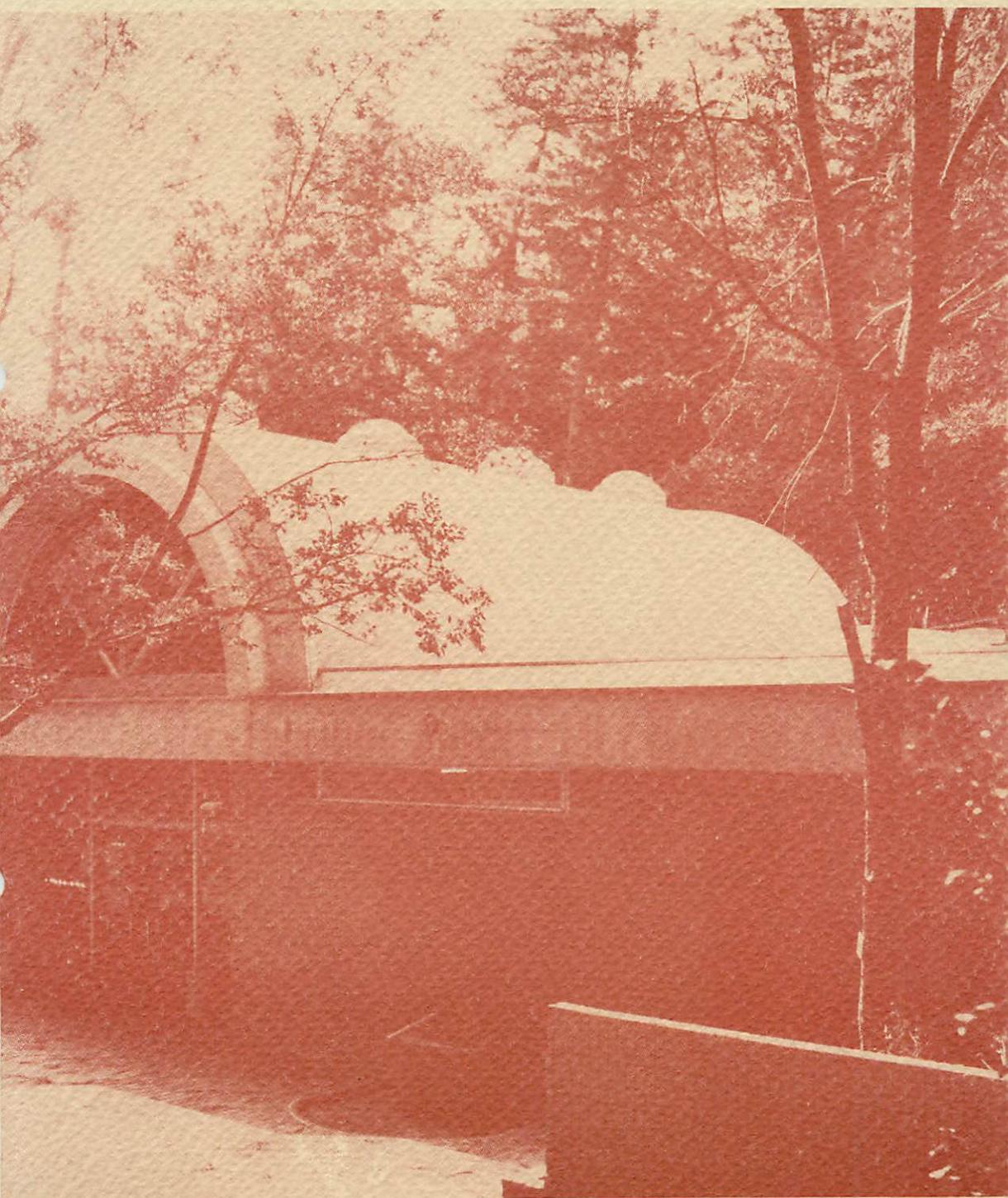


REACH OUT



1978～79

第1回 RYLAセミナー報告

発刊の辞



もくじ

~~~~~

|                             |       |    |
|-----------------------------|-------|----|
| 余島 R Y L A に参加した喜び          | 梶浦 瞳一 | 1  |
| 第1回ライラセミナーを行うにあたって          | 執行 孝胤 | 2  |
| 発刊にあたって                     | 深川 純一 | 4  |
| キャンプスケジュール                  |       | 6  |
| 社会の動きと青少年の実態                | 今井 鎮雄 | 7  |
| 来るべき余暇社会における<br>リクリエーションの意義 | 池田 勝  | 11 |
| 態度と理解                       | 武田 建  | 16 |
| ロータリーの歴史について                | 執行 孝胤 | 21 |
| 人と出会い神と交わり愛の火のもえるところ        | 梶浦 瞳一 | 27 |
| R Y L A について                | 深川 純一 | 32 |
| ライラについて                     | 山村徳太郎 | 36 |
| バズセッションより                   |       | 37 |
| 育てよう！心の花園を                  | 梶浦 瞳一 | 39 |
| 総てのものに愛をわかつあおう！             | 執行 孝胤 | 40 |
| 一隅でも明かるく                    | 今井 鎮雄 | 41 |
| 燃やそう友情の炎を                   | 高木 正徳 | 47 |
| 心に灯った火を大切に                  | 深川 純一 | 48 |
| ファイアーサイドミーティングを中心には         | 高木 正徳 | 49 |
| カウンセラーの感想                   |       | 52 |
| 参加者感想文より                    |       | 59 |
| 参加者名簿                       |       | 66 |

余島 R Y L A に参加した喜び



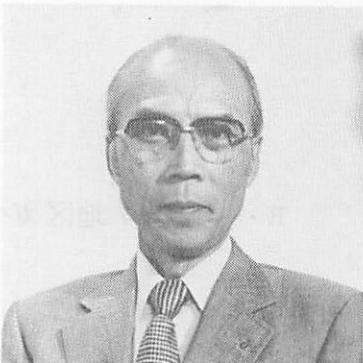
R・I 第 267 地区ガバナー

梶 浦 瞳 一

青少年に望む

若人よ  
善人となれ  
人をおしのけて成功者になるよりは  
貧しくとも清き善人になれ  
若人よ  
君らは強くなるんだぞ  
人間様を愛し  
此の世を美しくするために  
獅子のように強くなるんだぞ  
若人よ  
君の好きなものになれ  
しかし君は  
人間様の小使さんになるんだぞ  
正直で働きもので  
海のように愛の深い  
小使さんになるんだぞ  
余島での楽しい思い出を  
いついつまでも胸に抱いて  
(安積得也先生 (東京南 R C) 著詩集  
"一人のために" よりお借りして)

## 第1回 R Y L A セミナーを行うにあたって



R・I第268地区ガバナー

執 行 孝 崑

かつて 1970～1971 年度 R I 会長 William E Walk Jr は、  
"Bridge the gaps" と云うその年度のターゲットを全世界の Ratarian に呼びかけました。この gap の中には様々の gap があります。大人と子供との間にも gap があります。

ここに子供たちが大人の言う事をどう思っているかを示す話があります。

男の子が集ってゲームらしいことをやっておりました。そのリーダーになっている子が可愛い仔犬を抱えておりました。そこに年配の男が通りかかり「やあ、君たち、何かゲームをやっているんだろう。」「そう」「そりゃいい、おじさんも子供の頃はよくやったもんだ、ところでその犬はどうするのかね」「ああこれは賞品だよ」「で、このゲームはどんなことをするんだね。」

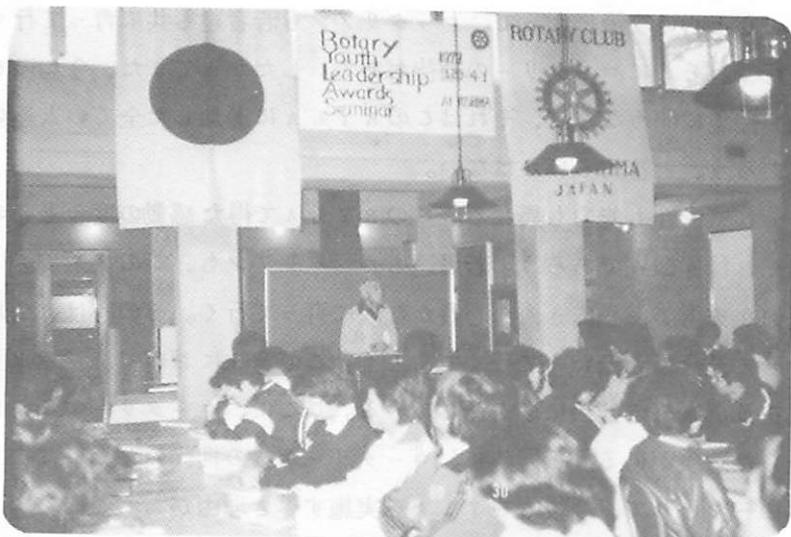
「"嘘つきごっこ" っていうの」「ちえっ おい坊や達、おじさんもゲームをやったが嘘なんかついたことはないぞ」とすると、その子は大声を出して「ゲーム止め、優勝者が決ったんだ。おじさん、今のは僕たちの聞いた嘘で一番だ、この犬はおじさんのものだよ」この話から、今の子供達の本当のところはどうなのでしょうか。我々が同じ様な年頃だった頃よりもよく物を知っているという事であります。

この様な gap は、この両者が対応するためにはお互いその gap をはさんで、それを越えるのではなくこちら側にいるままで相手と協力して行くという外にないのであります。

お玉じゃくしがカエルの小型でない様に子供は小さな大人ではないのであります。

子供達は、その固有な特長を持っております。次の世代をになうこの子供達に対して彼等と協力しやすい様な人々を作る事も我々にロータリアンの仕事ではないでしょうか。その協力しやすい様な人々、即ち青年達に対して「自分とは何か、自分は誰なのだ、そして自分は誰のためにあるのか」と言う事を知ってもらった時に奉仕の心が生まれて来ると思うのであります。即ち「自分というものは自分のためだけではなく他人のためにも存在するのだ」という事を自覚してもらったらば、その青年達は、我々の世代の誇るべき存在となると思うのであります。これらの青年達が我々とお互の間の協力により子供達の身になって理解し合う様になれば、この R Y L A セミナーの存在理由、即ち本年度 R I 会長 C.RENOUF 氏のテーマ Reach out ..... の具現となると思うのであります。

第268地区は第267地区と合同で、この機会を持つ事ができ夫々異なった特質を持った両地域が一つの目的のためにこの計画を実行し、そして大きな収穫を得た事に対して、両地区の実行委員の皆様を始め、現地の皆様に多大の感謝を捧げる次第であります。



## 発刊にあたって



RYLA委員長

深川純一

ロータリーの奉仕は、原理的には「育てる奉仕」、奉仕の実践家たる良質な思考をもった職業人を育てることがロータリーの眼目であるといわれる。ロータリアンの心を育て人格を高める、その高められた心が、やがてロータリアンの家庭、職場そして社会（地域社会・国際社会）へと伝わり、そのことによって社会全体を明るくして行こう、というのがロータリーの基本的な思考である。したがってロータリーが企画立案したこの RYLA も、やはり心を育てることがその眼目であった。心と心の交流によって、ロータリアンも若者達も共に育って行く、育て合って行く。そこにロータリーの期待がある。したがってまた、今この RYLA の成果を性急に問うならば、それはこの RYLA に参加した全ての人達の今後の課題であろう、と答えるほかはない。

人それぞれ感受性も能力も異なる。この RYLA で得た感動の度合も心の糧も、人それぞれ種々様々であろう。若者達もロータリアンも、この RYLA の体験の中から何かを得て、心広き人、心豊かな人に育って行く。その心は、やがて家庭、職場そして社会へと伝わって行くであろう。この意味において、ロータリーは、常に現在及び未来の社会に夢を託している。ここに、ロータリーがこの RYLA を実施した意義がある。と同時に、ロータリーが次の世代のためになすべき大切な仕事の一つとして、今後も RYLA を実施すべき理由がある。

ともあれ、これは、"或る感動の記録" である。

ロータリーが巨大な組織となり、ややもすれば、ロータリーの奉仕の本体たる心

の問題から遠ざかりがちな傾向もあるかに見受けられる最近のロータリーにあって、この R Y L A は、人々の素朴な心の触れ合い、心の育て合いがあった点において大きな意義があったと思う。

ロータリーの青少年奉仕については、「青少年と共にする奉仕」ということが言われている。しかし、この「共にする」ということは、言うは易く、その実践は難しい。けだし、「共にする」といえるためには、ロータリアンと若者達が、互いに対等平等であるとの認識をもって、共に話し合い、共に感動し合い、そして共に心を育て合うことが前提となっているからである。この意味において、この R Y L A のカウンセラーの人達の献身と愛情には、心からなる敬意を表したい。また、梶浦、執行両ガバナー、Dean 今井先生やカウンセラーの人達の態度言動をみると、ロータリーの眞の広報は、ロータリアン一人一人が広報の媒体でなければならぬということを痛感したのであった。

顧みて今回の R Y L A は、企画立案より実施に至るまで僅か 3 ヶ月足らずの短期間であったため、受講者詮衡その他につき正確な情報が行き届かず、ために、第 267、268 両地区のロータリークラブの皆様方には、大変御迷惑をおかけしたこと深く御詫び申し上げなければならない。と同時に、この R Y L A 実施につき、物心両面にわたる御支援御協力を賜わった全てのロータリアン各位に対し、心から御礼を申し上げる次第である。

最後に、このレポート発刊にあたり、深い経験をもって緻密な御指導を頂いた Dean 今井先生、資料蒐集作成に御協力下さった梶浦、執行両ガバナーはじめカウンセラーや R Y L A 委員の人達、そして、編集事務全般につき多大の御尽力を賜わった神戸西 R . C 事務局の京極さん。この素晴らしい人達に心からなる敬意と感謝を捧げたい。そして、若き受講者の諸君達が、現在及び未来の社会に、いつまでも健康で活躍されることを祈る！

<キャンプスケジュール>

| 3月29日 | 3月30日                   | 3月31日                             | 4月1日                 |
|-------|-------------------------|-----------------------------------|----------------------|
| 8     | 朝 食                     | 朝 食                               | 朝 食                  |
| 9     |                         |                                   |                      |
| 10    | 講 演<br>今井鎮雄氏            | 講 演<br>池田 勝氏                      | 講 演<br>武田 建氏         |
| 11    |                         |                                   |                      |
| 12    | 昼 食                     | 昼 食<br>野外料理                       | 昼 食                  |
| 13    |                         |                                   |                      |
| 14    |                         |                                   |                      |
| 15    |                         |                                   |                      |
| 16    |                         |                                   |                      |
| 17    |                         |                                   |                      |
| 18    |                         |                                   |                      |
| 19    |                         |                                   |                      |
| 20    |                         |                                   |                      |
| 21    |                         |                                   |                      |
| 22    |                         |                                   |                      |
| 23    |                         |                                   |                      |
| 24    |                         |                                   |                      |
| 25    |                         |                                   |                      |
| 26    |                         |                                   |                      |
| 27    |                         |                                   |                      |
| 28    |                         |                                   |                      |
| 29    |                         |                                   |                      |
| 30    | オリエンテーション<br>少年キャンプ見学   | 歌の指導法の勉強<br>レクリエーション<br>ヨット・テニス・他 | キャビンタイム<br>(バズセッション) |
| 31    | 夕 食<br>ブッフェパーティ<br>自由時間 | 夕 食<br>自由時間                       | 夕 食<br>自由時間          |
| 1     |                         |                                   |                      |
| 2     |                         |                                   | 離 島                  |
| 3     |                         |                                   |                      |
| 4     |                         |                                   |                      |
| 5     |                         |                                   |                      |
| 6     |                         |                                   |                      |
| 7     |                         |                                   |                      |
| 8     | ライラについての<br>お話          | キャンファイア<br>親睦の夕べ                  | 炉辺談話                 |
| 9     | 自 由                     |                                   |                      |
| 10    | (ディスコ タイム)<br>キャビン タイム  |                                   |                      |

## 社会の動きと青少年の実態



Dean  
今井 鎮雄

今の時代に我々がどのように生きているかを考えながら、大きな観点から青少年の理解の仕方を考えてゆきたい。

第一は、世界は激しく変動しているという事実である。単的に表現して米国は自由、ソ連は平等を重んじている国であるが、夫々にベトナム戦争やチエコ侵略によって世界に対しての米ソのイニシアティブが失われ、今までのような信頼が得られなくなった現在、第三世界からの発言が自然に強くなり国際関係を形成していく主体が国家ではなくなり、民衆（人間）であると考えられるようになった。経済の世界でも One World Problem という考え方方が世界中の人々の中に浸透してきた。これは人間同志が仲良く生きていく社会を作るにはどうすればよいかを真剣に考え、国際間の問題や世界が抱えている諸問題を考える時、人間個人、一人一人の人間を大切に考えてゆかなければ世界のことも考えられないだろうという考え方である。シュマッファーは「Small is Beautiful」と言い、ルネ・デュポスは、50年後の人間と社会を予想し、世界人類という視点と地域の個性的充実と発展という二つの見地から、人間の新らしい社会は生まれるであろうと述べている。

ロータリーでは創立 75周年を記念して Health, Hunger, Humanity の 3 H 運動を提唱している。ロータリーケアという言葉を使っているが、世界中の人々の 3 H を推進するために立ち上ろうという運動である。世界の大きな流れの中で、自分のことと共に他人のことも考えるという精神が必要だという考え方である。

第二は教育問題が大きく変りつゝあるということである。1970年代になって、世界で高等教育を受けた人が51%を越えた。社会が民主的になり、人々は知りたいことを知る為に勉強を始めたと言えようし、又世界が技術的に高度になるに従って、高度の教育が必要になってきたとも言えるだろう。

明治政府が教育を始めた事は、近代国家日本の原動力となったと言える。かつてアジアが近代化を急いだ時失敗したのは、デモクラシーという精神的なバックボーンがないうえに、工業化する為の技術の知識もなかったからであると思われる。アジアはもう一度、基礎から近代化をすゝめているが、その第一はまず教育ととり組む事であった。日本の教育を考える時、第二次大戦後の新しい形の教育は、民主主義の教育であり個の尊重ということであった。しかし基本的には民主主義と言われたが、その教育も新しい問題を生んできた。

一つは、個の尊重ということは、日本の伝統的社会の価値と異なっていること。二つめは、米国においても、個の尊重の教育から、技術教育に没頭し、日本でもこのやり方に従って、教育の根本を見失うことが多かったために、やがて1960年代の大学爆発という状態を生む大きな原因の一つとなった。

永井道雄さんは、教育について次のように言つていられる。

1. 教育は権威がなければならない。教育は人間を育てるのであるから、政治等に支配されるものであつてはならないのに、日本ではそうなりやすく、改めなくてはならない問題の一つである。
2. 教育はいつの間にか技術革新の手段、経済成長の手段になってきている。産学協同という形の教育のあり方はまちがいである。

又ポールティリッヒは、教育には三つのジャンルがあるといつている。

1. Technical Education 技術教育
2. Humanistic Education 人間がお互に豊かになろうという教育
3. Inducting Education 人間とは何かという真にまねき入れる教育

ところが、現実には技術教育ばかりが先行した為、人間として大切なものは何かということではなく、どれだけの能力があるかということをはかる試験第一主義の教育が横行しているといってよい。しかし世界的視野にたってみると、世界の状況が人間の個人を中心をおいて一人一人の人間の問題を考えなければならぬ

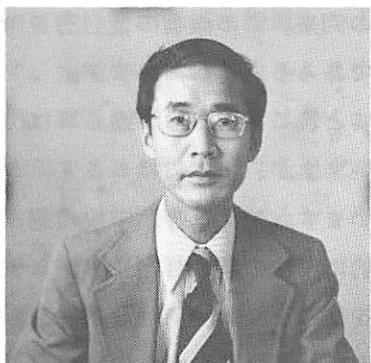
状態となった。技術教育というものからもっと人間を大事にする教育、言わゆる教育革命が世界中に深く潜行してきた。人間を商品としてある種の効果だけを考えていった世界から人間を中心として考える世界に変ってきた時、経済学でさえ人間を商品として考えることが出来なくなった。余島のインフォーメーションセンターに飾ってあるばらの絵を書いた西村勇三君は障害者であるが、少年の時この肢体不自由児キャンプに参加し、自分以外のもっと重度な障害児と出会い、リーダー達の奉仕の姿を見、又彼等にはげまされ、今迄障害児であるという理由で消極的であったことを自ら反省し、自分の出来る事は何かを真剣に考え、足で絵を書き始め、画家として立派な生活をおくれるようにまで自分を高めた。これは個人を大切にする教育のよい例の一つである。しかし今の日本でこのような考えがうまくいっているのだろうか。日本も工業先進国であるから、当然都市化ということが起つてくる。都市化をはかつて日本が持っていた共同体社会の崩壊ということであり、新たに異質の人同志が出会い、新らしい連帯の社会が生まれ、次第に成長し肥大し組織化されてきた。かつて共同体の一員として固定されていた自己というものが充分に克服しないままに、一人一人の人間の個性を大切にしない大衆社会に入れられたところに今の青少年達が何をしてよいか分らない状況を生んでいる。彼等はかつての伝統社会におさまる事も出来ず、マス化した現代の社会の中で自分を失い埋没させられているのが現状であり、自分を社会的な形で取り上げることが出来なくて、自分の情緒的な満足の中で、自分さえよければという所に逃げこんでいる。今の青少年に必要なのは、基本的にはまず一人一人の人間性をとりもどさせることである。我々が子どもを指導したり、青少年と一緒にになっている時、どんな青少年を作るかというブループリントを持っているだろうか。京大の総長が入学式の訓辞に「諸君自殺するな」といったことは「学生が本当に持つていなければならない将来の設計図を諸君は持っていないんだぞ」と言ったことと同じである。子どもをどんな人間に育てるかという設計図を持っていない事が我々の問題の中、現象の中に表われてくる。日本の社会は包むという母性原理の社会であり、母親は子離れしにくい。反対に父性原理は断るということであり、自己を克服し確立していくには、対抗していく父親が必要である。世界に通用する新しい社会をこれから作っていく青少年を育てるには、自分達の小さい世界の中だけで單なる思いつきの教育をするのではなく、

もっと視野の広い設計図を作つてゆかねばならない。公的なしつけが充分でなくいつも他者のわく組みの中で生き、自分自身の価値判断を持たない青少年を育てたのではだめである。自己のしっかりした価値判断を育てるには今の世界が激しく動いていることをよく理解しながら、新らしい世界におけるブループリントを作つていかなければならない。同じような事が社会教育・学校教育にもいわれる事である。

今の学校教育について、松原先生は次のように述べていられる。学校においてボランティア教育が行われていない。競争社会の学校では仲間が出来ない。他者への奉仕する心を育てる教育が欠如しており、社会福祉に対する教育が欠落している。弱いものをどこまで大事に出来るかということが、今の私達の社会をはかる指標になろう。福祉教育の欠落ということは、人間を大事にする教育の欠落とも言えよう。

皆さん方の働きを今の仕事にとめず、もっと高いレベルで新しい青少年の為のブループリントを作ることを課題としてほしい。最も大切なことは、「私達はどのような目標を定めて青少年を育てるか」ということでしかない。今後ともそのことについて皆さんに考えていただきたいと思う。

## 来るべき余暇社会における レクリエーションの意義



筑波大学助教授

池 田 勝

1971年、丁度今から10年前私がアメリカにおりました時、日本映画週間が催され、毎晩日本映画が上映されました。ところが、チャンバラ映画でない日本の若者を描いた映画「若者は行く」にアメリカの若者の反応が上映中あまりない。私はアメリカの若者と日本の若者の違いで興味がないのかと思いましたが、終わりに異常な拍手があったのです。彼等は大変な感激ようでした。日本の若者の前むきにまじめな態度に心うたれ、テーマ音楽のスバラシサをたたえました。国が違っても人間にとてふれあうものはいつの時代にも同じではないか。国を超えて時代をこえていつの社会にも分かちあうものは同じではないかという事を実際に経験しました。一日一日が変化のはげしい時代ではあります世の中が移り変わっても変わらないもの、変わって欲しくないもの、これから世の中を見る目に二つの目を持たなくてはならないと思います。一つは何が変わるのか又変わってゆくべきなのか、変わるものに対する見方、もう一つは変わらないものは何か、えてはいけないものは何かを見る見方がもう一つの観点になるのではないかと思います。

レクリエーションとかレジャーに関してみると変っていくもの、みんなが対応してゆかねばならないのは、自由時間、レジャーが増えふえていくという否定出来ない事実であります。イギリスのノーベル物理学者ガボールを日本で有名にしたのは、オイルショック前、未来学がブームの時に「未来を発明する」という彼の本が翻訳されたことです。この本には人類がこれから直面するであ

生しています。ギリシャ語はS C H O L E、英語のSchoolに当てはまり、元来レジャーという言葉は学校という意味であったようです。即ち、その意味するところはソクラテス・プラトン・アルキメデス等哲学者と対話する場所、あるいは、その様な人の話を聞いたり、自分の考えをぶつけたり、もっと進んで政治に積極的に参加する等の意味があります。レジャーに対比される仕事というのはascholiaでそれにアをつければよい。現在でいう仕事あります。英語で言うとノン・レジャー。レジャーでないものは仕事。仕事とか労働というものはレジャーによって規制されていました。これは今のレジャーとは全く逆ではないでしょうか。現在はレジャーというと仕事の残りの時間、あるいは学習の残りの時間と考えられています。本来レジャーの持っていた意味はレジャーによって労働がある。レジャーの方が中心で、生活の中心概念がありました。これは考えるべき事あります。ラテン語のもつレジャーの意味

"Liceret"は許可書的意味があり、レジャーとは特定の人に与えられるものであります。有閑階級、有閑マダム等という言葉からも察しられます。経済的ゆとり、社会的地位を持った人に与えられるのがレジャーであります。今の社会ではレジャーは特定の人のものではなく、むしろ一般の人ほどレジャーを多く持っている場合もあり、むしろもっと問題なのはレジャーを持たなくとも持たざるを得ない人。失業によって得るレジャーさえあるわけです。現代の言葉でいうとマスレジャー、大衆レジャーという言葉にしても「大衆」と「レジャー」という2つの言葉が結びつくということもおかしくないものになってきました。レクリエーションということはふえてゆくレジャーをどう過ごすか、追求の仕方だと思います。ゲームや歌もその一つではありますがそれだけではない、レクリエーションには多くの方法があります。その方法を広げてゆくのがレクリエーションであり、これから余暇社会において、この余暇をどう過ごすかが大きな問題点となるわけです。

第1はレクリエーションはいつの社会にも人間と人間のつながり、心のふれあいにはたず役割りがあり、これからもますます重要になってくるでしょう。夫々の人間の考え方方が違うかぎり人ととの心のふれあいは大変なものであり大切なものであると思います。

第2にレクリエーションは自然とのふれあいが大切であり、からの社会で強調されるべき点であります。人間にとってもっと自然との調和を考

えてゆかねばならないと共に自然の中で自分がチャレンジする機会を持たなくてはならないという事です。最近イギリスの野外活動のやり方が日本でも紹介され、非常に注目をあびています。アウトワード・パウンド・スクールといって16才から20才の青年を26日間集団（キャンプ）生活をさせ、自然の中でチャレンジする方法がいろいろ工夫されています。これが各国でも非常に普及してきました。つまり、チャレンジの場を与える事が必要となってきたわけです。アメリカでも 1975年に徴兵制が廃止されて以来、青年に国や社会とのかかわりあいを持たせるという事で、1977年に青年に自然の保護をさせようという計画のもとに、16才～23才で職のない青年あるいは国土をよくしたいと考えている青年を集めて、1年間野外生活をしながら自然の保護につとめたり、何らかの型で社会とのつながるトレーニングの場を与えています。日本では若者をきたえる場があるかどうか考えるべき点だと思います。私は、いつの時代でも青少年がチャレンジする場が必要ではないかと思います。そして自然との結びつきの中でもっともっと強調されるべきだと思います。

第3にいつの時代にもレクリエーションで強調されるべき点は体をきたえるという事です。心と体のバランスをとる運動「トリム運動」が各国で強調されてきました。我々の社会は或る意味では福祉社会と言えましょうが、福祉社会では我々は夫々に負担しなければなりません。高福祉、高負担であります。将来においてわが国では4人の若者が1人の高令者を見る社会が来ることは間違いないことであります。そうなると自分の健康を考えなくてはならないと共に自分の家族、近辺の健康、コミュニティ全体の健康を考えないと大変であることが分ってきました。

第4に自分を高める、生涯教育という言葉がありますが、変化のはげしい社会にあって、新らしい知識が常に要求されると共に、常に自分を高める時代に流されない自分自身を作ることが大事であると思います。

リーダーという事を考えますと、これから社会でどんな役割りを果たすかを考えると、リーダーとは色々な技術指導だけではない。それも大切かもしれませんのがそれのみでないものが必要だと思います。兵庫県にアニメーター制度という言葉があります。アニメーターとは活気づける人、人々に活気を与える人々とさせる人、これから余暇社会においてこういったリーダーの必要性が増々ふえてくるものと思われます。

# 態 度 と 理 解



関西学院大学社会学部教授

武 田 建

## 1 コーチの4要素

もう何年か前のことである。テキサスのラボックという田舎町で開かれた、オールスター戦を見にいった時、当時全米ナンバー・ワンのノートルダム大学のバーシグエン監督から次のような話をうかがった。

それぞれコーチというのは、いつも誰それが卒業してしまったから痛い、誰それが負傷したので困ったと不平不満を言いすぎる。学生スポーツであるかぎり卒業はあるし、アメリカンフットボールのように過激なスポーツをすれば怪我をするのは当りまえだ。出ていった選手の穴をぶつぶつ言い負傷をなげくよりも、今自分のチームのなかにいる選手を1人1人よく吟味し、何ができる何ができないかをよく見て、適材適所にそってゆくのが、監督としてのお前の役目だというのだった。

How コーチはまず選手にやろう、学ぼうという意欲をもたさなくてはならない。その初めには、速成可能な目標を与え、誉めながら少しづつ要求する水準を高めてゆかなくてはならないという。それにもまして大切なことは、コーチがいくら知識をもっていてもそれだけではたいした戦力にならない。それをどうやって選手に加えるかということが大切なのだと言う。そのためには、具体的に、簡潔に、丁寧に、わかりやすく話をしよう。

Why コーチは、ただあれをしろ、これをしろと命令するだけではいけない。今の若い人は昔の若者とは違う。一つの練習一つの動きでも、それは一体何の

ためにどういう目的と理由でやるのかと説明し、納得させよう。

What フットボールではどんな体型を作りどんなプレーを用意するかという作戦は大切だが、もっと重要なことは、選手の体力、能力、適性とコーチの考えるフットボールの理念（つまりフィロソフィー）を上手に組み合わすことが監督の役割である。

## 2 受容

最近では誰もが人間関係を主にチームワークを力説する。その通りであろう。人間関係の一番基礎は、相手をあるがままに受入れるという受容があることは否定しない。しかし、この言葉どうやらカウンセリングのロジャースか誰かが使い始めたものようである。週1回45分か50分の面接ならば、それもよいだろう。しかし、コーチのというのは、毎日2時間か3時間グラウンドで指導し試合のときには、ここという時に準備してきた大切なプレーを展開しようとするわけだ。だがそんな時にかぎって、選手というのはやれと言ったことをせずやるなと言ったことばかりるのである。そんな時にも、「罪を憎んで人を憎まず」の精神で、モナリザのように微笑をたたえていると言うのだろうか。こっちも人間である。頭にくる腹が立つ、つい選手をボロクソに怒鳴ってしまう。叱るのが悪いとは言わない。怒鳴ったらいけないとは言わない。しかし、私は気が短いので、思わず知らずカッとなって言ってはいけないことまで口にしてしまう。そんな時、自分の非に気づいたら、その場で練習が終ってから時には家に帰ってから電話で怒った相手に詫びることがある。コーチだから、監督だから、先輩だから横車を押さず自分が言いすぎたと気づいたら、すぐあやまることにしょう。相手を受容する前に、コーチは自らに正直になり、自らをあるがままに受容れることが大切ではなかろうか。

## 3 「叱るよりも誉めろ」と言うが

誰しもが「叱るよりも誉めろ」と言う。しかし、そう簡単にできるものではない。私が関西学院大学のフットボール部の監督になったのは、1966年のことである。それまで私が母校は10年ばかり日本の王座から見放されていた。幸か不幸かその10連敗のうち7年間私は米国に留学していたので悔しい思いをせずにすんだ。7年振りに見る母校の試合、王座決定戦では真赤なユニフォーム

を着た無敵日大があばれ回っていた。そんなどん底のチームをコーチしろと言う命令がきた。日本一になるどころか、関西の王座もあぶない状態だった。

コーチになって、はたと困ったことは、自分でプレーをしたことはあっても他人に教えた経験がほとんどないということだ。子供は親に似て、つまり親の真似をして大人になり、夫や妻の役割を演ずることができるようになる。しんまいコーチの私は、自分の学生時代の監督さんのやり方を真似た。厳しい人だった、こわい人だった。その人の表面的なところだけ真似して、選手が失敗すれば怒鳴りつけ、一寸気合いがはいっていないと悪口雑言をあびせた。選手は嫌がっていた。私も不愉快だった。でも私はそれ以外の方法を知らなかった。2年目の秋に宿敵日大を倒して11年振りに日本の王座についた。選手もOBも皆な涙と汗と泥と鼻でくちゃくちゃの顔をしながら私に抱きつき胴上げしてくれた。最初は嬉しかった。しかし、もっと嬉しかったのは選手がやってきて「優勝できたのは先生のおかげです」と言ってくれたことだった。自分は選手たちに受けいれてもらえた。なんといううぬぼれだったろう。

冬のシーズン・オフが経るのを待ちかねて私はグランドに行った。甲子園で胴上げをしてくれた選手たちが私がくるのを待ちうけていると期待して。とんでもない。選手たちは私の姿を見ると、あのうるさい奴が来たと嫌な顔をするではないか。不愉快だった、腹が立った。俺がこんなに一生懸命にチームのためにやっているのに。恩知らずめ。こんな気持で家に帰って妻にハツ当りをすると、妻が息子に、息子が娘に、妹は庭に出て誰もいないので犬をけとばした。犬はキャンキャンないて家中が騒がしくなった。

こんな生活が続いたら大変だ。何とかしなくてはならない。思い出したのが「叱るより誉めろ」という言葉である。

自分でも選手の失敗をボロクソに言っていることは認めながらも、心の中では、「いいや、俺は誉めている」という気持があったことは否定できない。そこである日、練習前にマネージャーを呼んで、「今日の練習中に俺のそばに立って、俺が誉めたらこのノートに○を、叱ったりブツブツ言う度に×をつけろ」とたのんだ。練習が終ってノートを見ると、×ばかりで○はほんの少しあかない。これにはがく然とした。

翌日グランドにゆく時には、「今日は選手のファイン・プレーを誉めるぞ」と自分に言い聞かせながら行ったが、結果はやっぱり駄目である。「どうして

俺は選手を誉ないのだろう」と考えてみると一つのことに気がついた。私は選手の素晴らしいプレーだけを誉めようとしているのである。誉めるプレーの水準を選手のレベルに合わせなくてはいけないということはわかっているが、何だか選手に対する要求水準を下げるということにはコーチとしては抵抗があるというわけだ。

#### 4 全ての動きは分解できる

ここで私が考えついたのは、全ての動きは幾つかの小さな部分からできあがっていることである。例えば、ボールを受けにゆく場合ならば、まずスタートに出る時のかまえ、第1歩目の足の出し方、全速力で走る、スピードを落す、右か左にまがる、ボールの方へ顔をむける、両手を出す、ボールをつかむといった幾つかの動作に分けることができる。その一つ一つの動きを練習すればそんなに難しいことではない。簡単なことだからうまく出来る。出来たら誉める。選手はそれを繰り返す。そして一つを二つ、二つを三つと少しづつ結びつけることにより、やがて一連の複雑なプレーができるようになるのである。

そうしてコーチする上で必要だったことは、言葉で説明するだけでなく、図に書いて示したり、出来るだけコーチがデモンストレーションをして見せることである。そしてのみこみの悪い選手や初心者にはスローモーションでゆっくり急がずにやらすことがコツのようだ。コーチ自身がデモンストレーションできないならば、他の上手な選手を使ったりするのが有効だ。チームに経済的に余裕があるならば、映画やビデオにとって選手の動きを分析し、良い点悪い点を指摘さすのは進歩を早めることは確実である。

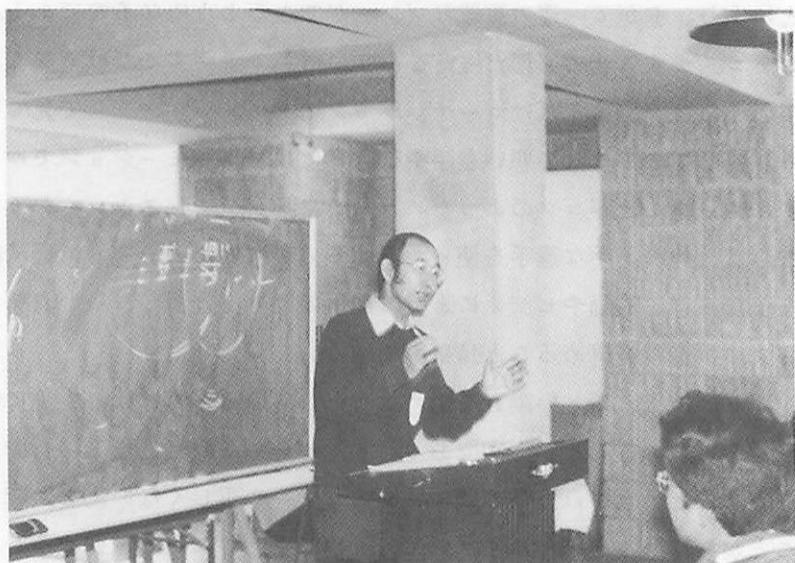
選手が新しい技術、新しい動きを憶えようとしているときには、すぐに毎回一貫性をもって誉めることが大切である。すぐに誉めないと、正しい行動なりプレーを誉めるというごほうびの間にまずいプレーや正しくない動きが起ってしまうことがあり得る。うっかりすると、そうした悪いプレーを誉めることになりかねない。この原稿で私は、「誉める誉めろ」とくどく書いた。そのもう一つの理由は、選手というのは、いくら一生懸命やっても認めてもらわざず誉めてももらえないとい、やる気をなくしてしまうからである。他者の関心注目というごほうびなしに同じことを繰り返していると、苦痛になり不愉快になるものだ。だから、身についた行動、出来るようになったプレー（動き）は毎回誉める必

要はないが、ときどきこれを誉めることが大切だろう。

時には、「上手とか、うまい」と言わなくても結果を伝えるだけでもごほうびと同じ効果がある。選手が何回ボールを受けて何回捕球できたか、10ヤード走って何秒だったといった結果をすぐフィードバックして言ってやることはとても励みになるし、いい結果をもたらすことを経験した。

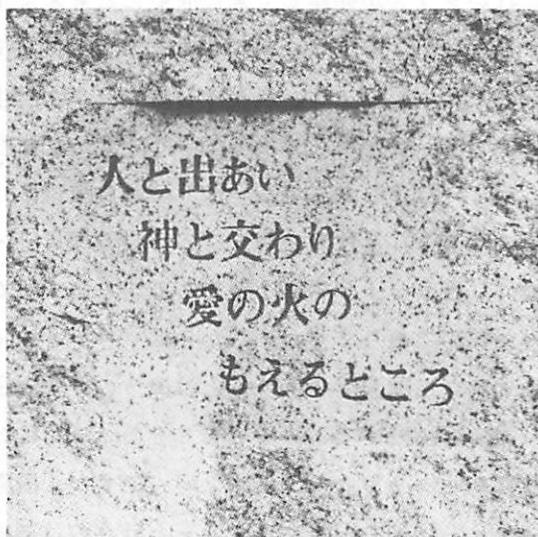
人間の行動と心理は複雑で、ここで書いたような単純な方法だけでは全ての問題を解決できないことはよくわかっているつもりだ。

しかし、スポーツの世界で私が少しでも成功することができた原因の一部は選手のよい点を誉めようと努力したことではないかと思っている。



# RYLA そして ROTARY

大山の風が吹き止むるか。さあ、今、その一息を離れて、もう少し、もう少し。  
さあ、もう少し。残りの生きがい、この間の歴史、自分の長い人生を振り返って、  
もう一度、自分自身を振り返らねば。もう一度、自分自身を振り返らねば。  
もう一度、自分自身を振り返らねば。もう一度、自分自身を振り返らねば。  
もう一度、自分自身を振り返らねば。もう一度、自分自身を振り返らねば。  
もう一度、自分自身を振り返らねば。もう一度、自分自身を振り返らねば。  
もう一度、自分自身を振り返らねば。もう一度、自分自身を振り返らねば。



アーティストの心。アーティストの心。アーティストの心。アーティストの心。  
アーティストの心。アーティストの心。アーティストの心。アーティストの心。  
アーティストの心。アーティストの心。アーティストの心。アーティストの心。  
アーティストの心。アーティストの心。アーティストの心。アーティストの心。

## ロータリーの歴史について

### 執行 孝胤

1905年恐慌の中のシカゴに於て何らかして世の中を美しくしたいと念願した一人の青年弁護士であるポールハリスと云う人がありました。彼は親しい友3名の友人と語り合い2月23日に友情の日に一つの会合を持ったのであります。シカゴロータリークラブの出発であります。そして彼等は毎回輪番制に夫々の事務所で会合を行ったのであります。そして世の中を美しくして行こうじゃないかと云う呼びかけに心ある人は寄ってくるはずでございます。しかしながらそこで彼等は考えた。同じ職業の人ばかりが集ったら同業者クラブになってしまふじゃないか。だったら同じ職業の人は入らずに一つの職業から一人だけそう云う理想を持った人を選び出そうじゃないかと云う事が我々が今行っているロータリー組織、つまり一業から一人だけが入ると云うクラブになって来たわけであります。これがクラブが発達して来た歴史だと考えて頂いて結構だと思います。そうして現在は152の国がロータリークラブを持っているわけです。そしてその数は1819と云う数ですが、現在今日もクラブが誕生して1820になっているかも知れません。或いは1821になっているかも知れません、そう云う風にして拡がってまいりました。現在全世界の会員数は835,300人今日今その人々は申し上げたような奉仕の心を一つの方針の様に守って御互いに仲良くして人々のためになろうじゃないかと努力して居ります。これが現在のロータリーに立ち至った要約であります。しかばロータリークラブとは何であるか。ロータリークラブと国際ロータリーとは違うのです。国際ロータリーのメンバーは各ロータリークラブであってそしてそのクラブにはそれぞれ例えば私は268地区の西宮ロータリークラブのメンバーですが、国際ロータリークラブと云うのはありません。即ち国際ロータリーと云うのはあるがそれを構成しているメンバーと言うのは世界全国に拡がって存在しているロータリークラブである。これをはっきりと認識していただきたい。ところでロータリーはその様に発達して現在に至りました。では日本のロータリーはどうであろうか。日本のロータリーは大正9年、丁度第一次世界大戦が終って2年目ですが

1920年その当時の三井銀行の重役であった米山梅吉と云う人が日本にロータリークラブを始めて東京に作ったわけであります。

そして正式に大正10年の4月1日に国際ロータリーの一員であると云う認証を受けたわけであります。それ以後太平洋戦争までたくさんのクラブが生まれました。兵庫県では神戸クラブと私の属しております西宮クラブだけであります。四国では西から申しますと、宇和島、今治、松山、徳島、高松、高知と云うところです。今現在23地区に分れて居ります。各府県が一つづつ地区を構成しているわけではございません。兵庫県はいみじくも一県一地区になって居ります。日本で一県一地区を持っているのは兵庫県と千葉県と埼玉県であります。四国では四国四県が一地区をなして居ります。だいたい一地区はクラブ数が35から70前後まであるところがございます。大阪と和歌山を含んだ地区は80程のクラブがあります。四国は57クラブです。兵庫県は53クラブです。今から10年前は四国と兵庫県が368地区として兵庫県と四国全域が一つの地区をなしていました。昨年度から300が韓国、台湾の方に移りました。そして四国は267、兵庫県は268となりました。266は大阪、和歌山で一つの地区を作っております。そう云う意味で267と268はかっては同じ地区だった。梶浦ガバナーと私とはガバナー連絡会議にまいりましても隣同志に座わります。彼は大阪大学での先輩でありますけれど、同窓生であると云う親しさもあります。こう云う風にロータリーと云うものはだんだん拡がり発達して行って地区が分かれ来たわけです。現在日本では23地区に分かれて居ります。そして先程の話に戻しますが太平洋戦争の時に国際ロータリーを脱退したわけです。脱退して切れたかと云うと、決してそうではなかったのです。この素晴らしい理想を求めて毎週曾ってロータリークラブであったところの町、あるいはそのメンバーはかくれて地下組織とでも云いましょうか、神戸で云えば毎週木曜日木曜会と称して例会を開いておったのであります。西宮は火曜会と称しまして宝塚ホテルでやると云う風な型で戦争中を過してまいりました。戦後日本にもロータリーを作ろうじゃないかと云う運動が起きました。そして現在のような発達を遂げていったわけであります。ロータリー精神については始めに一寸触れましたが精神に関しましては時間もございませんので梶浦ガバナーの方にお譲りいたします。

戦後ロータリーの運動が何故このように日本で発達をしたかと云う事は、そ

れは又後で述べたいと思います。

現在我々の日本では 1429 のクラブがあります。78576名の会員がありますがまだまだどんどん増えつつあります。何故このように増えていったかと申しますと戦後日本と云う国は四面海に囲まれております。外国に行くにも飛行機で 1 時間も飛ばなくてはならない。一番近い韓国にしましても 1 時間はかかります。しかしながら、ヨーロッパ、アメリカにおきましては一またぎすれば外国に行ける、そのために自分の国と云うものを大切にしなければなりません。彼等にとっては、大切にすると云う事は、自分の国と云うものをよく知らねばならないのです。私は昨年 8 月 268 地区で高校生を対象にした Inter Act の研修会があり神鍋高原で行われたのに参りました。柏原高校にアメリカの女子高校生が留学して居りまして、彼女に日本についてどう思ったと聞きますと、日本について色々勉強して来ましたが、その勉強が何にも役に立たなかった、来てみて本当に日本が分った。そして彼女はアメリカをよく知っています。よく知るには現地に行かなくては駄目だと云うことです。と云う事は今日皆さん方がここにお集まりになり実際に皆さん方と心を打ちあけて話し合ってみないと分らないと云う事です。経験をつまないと駄目だと云う事であります。そう云う意味で先づ皆さん方は、日本の内情をよくご覧になると云う事です。足許を充分に見ると云う事です。そして外国の事をご覧になって研究なされば比較がよくできるのではないかと私は思っています。

そこでロータリーは一業種から一人だけだと云う、これがとても良いと思うのです。ロータリーの例会は毎週もっております。日本では数人集まれば金もうけの話しをするのではないかと思うでしょう。これが日本の通念じゃないかと思います。金もうけの話と云うことになれば必ず同業者と云う事になります。ロータリークラブの場において同業者はいないわけなのです。せいぜい居って 2 人これは第 2 正会員と云う事です。自分は一生懸命自分の職業をやって来てロータリークラブの例会に出たら心が洗われて童心に帰えれるわけです。これがロータリークラブなのです。あるクラブで私はこんな経験をしました。或る人がロータリークラブは金持ちの昼飯会クラブに過ぎんじゃないかと、ロータリークラブのメンバーになる事を頑強に反対して来たんが入ってみるとこんな素晴らしい組織はないじゃないか、何故かと云うと一業一人だからその間に利害関係がちっともないからです。以後その方は 100 % 例会に出席しておられ

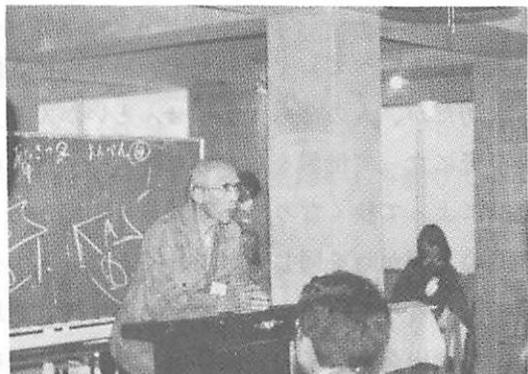
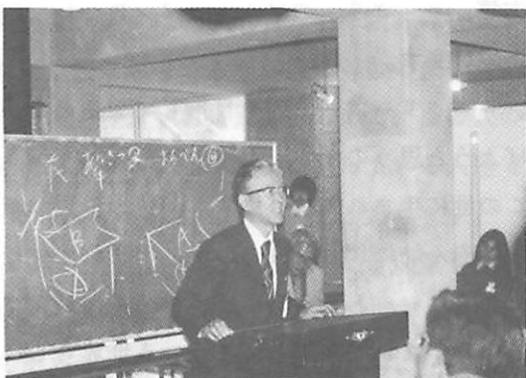
ます。やはりこの人は経験によってその素晴らしいを得られたのじゃないかと云う事を感じました。

ところでロータリーの目的とは何だろう。これは我々は常に幸福を求めて生活しております。しかし求めるために常に緊張の連続では人間はだめです。やはりレジャーが必要です。あの素晴らしい弓は弓の弦をいつも張っておってはいざと云う時の役に立ちません。やはり使わない時はつるを外します。それと同じ様に人間が幸福になろうと云う目的の為には或る節が必要なのではないかと思います。皆様方の学校でもそうだと思います。中学校3年、高校3年と云う節があります。その節のはじめに "よし俺はこうやろう" "次はこうやろう" と云う希望を持って生活をして行かれると思います。希望がないと云う事は人生において何もないと云う事です。そう云う希望が又ロータリーの社会でいまいえるのです。そう云う風に相手を幸福にしてやると云う事は自分も幸福になると云う事です。私はよく日本国中車で飛び歩きますが、高速道路を通る時お金を払います。その時必ず "ありがとうございます" と云います。隣に座っている人が "先生どうしてありがとうございます" と聞きます。 "有難いじゃないですか、高速道路を走らせてもらう事ができてる。" "有難う" と云ってお金を渡すと "やあ！" と云って切符をくれる人も居ます。又或る時には、 "あの先生有難うと云って何云っとんのや" と云う顔をする人も居ます。そして私は今の日本の若い皆様方にサンキュー、エクスキューズミーがないと云う事を感じています。この言葉位、人間社会を豊かにするものはないと思います。ロータリーにはそう云う風に人間社会を美しくしようと云う人々の集まりだと云う事です。その為にどんな奉仕をしなければならないか。そこで私達は4つの奉仕の部門を持って居ります。一つはクラブ奉仕と云うクラブ内でお互に切磋琢磨するための奉仕、そのなかには色々広報のこともございましょう、情報を入れる事もございます。青少年に関する事もございます。

それから自分の職業に奉仕しようと云う職業奉仕の部門、それから社会奉仕と云う部門、そして国際奉仕と云う4つの部門がある。それぞれの部門に向って我々は毎日毎日を心豊かに過して行っているわけです。そしてロータリーには4つの綱領と云うのがあります。つまり広く知己を求めて奉仕の機会を多くしつまり自分一人で奉仕するよりたくさんの人と共に奉仕しよう。例えば皆さん方が少年達に教えてやろうとする時、一人でやるよりは沢山の人達と共にやる

方が良いのではないか。そのためには友達をたくさん寄り合って活動する。その為に知己を多く求めて奉仕の機会を多くする。2番目、各自の職業に誇りを持て、私は耳鼻咽喉科の医者でございます。いかにして患者を早く社会に復帰をさせてやろうかと云うこれが医者の職業奉仕の最初ではないかと思います。つまりその職業に対する誇り、その職業の道徳的基準を高めていこうと云う。これが職業奉仕につながっていると思います。次は公私の別なく奉仕の理想を実行する、公も私も何もない世の中は一つじゃないか、皆と一緒にになって世の中を美しくして行こうじゃないかと云う社会奉仕。最後に国際的にも理解と友情を広めかつ深めて行こうじゃないかと云う4つの綱領をすすめるために一番良い方法はなんだろう。ここに4つのテストと云うものがあります。つまり、自分が或る一つの行動を起したり一つの言葉を云う場合、次の4つの事を振り返ってもらいたい。先づ真実かどうか。即ち自分の云っている事、している事が真実かどうか、次に皆に公平だろうか、3番目に好意と友情を深めるか自分の云っている事が相手に対して役に立つか、好意があるか、同時に友情を深めるだろうか、そして最後に自分の云っている事、している事が“皆の為になるかどうか”この4つのテストこれが我々がロータリーをすすめて行く時に持っている事です。後5分ですと高木先生からお報らせがありました。貴重な時間です。昔村の若い衆と云うのがあったでしょう。これは明治の中期頃まであったのです。村の若い衆と云うのは皆様方より一寸若い方々で村で団体を持っていました。やった事は良いにしろ悪いにしろ色々ありました。村の若い衆が一旦緩急あればその村の為に自警団にもなったのです。これは頼まれてやった事ではない。又病人があれば救急車の役も果たしたでしょう。火事があれば火を消す、何も頼まれず村の為なら何でもやると云う若い衆と云組織があった事はご存知と思います。柳田國男と云う民族学者がこの事について書いておられます。はじめに申しましたように各々諸君が自分達がいなければ村の治安が保てないのだ、村の為に自分から努力してやった。しかし、今の日本の社会ではどうでしょう。成人式までは皆さん少年として取り扱われて来たわけです。20才になると途端に大人になってしまう。その間のプロセスは全然皆さんには認識出来なかったのではないでしょうか。その云う社会が曾って日本にあったと云うこれが良いか悪いか分かりません。悪い面があったからそう云う村の若い衆と云うものが失くなったのかも知れません。まあ女性も居られるから

何ですが、村の若い衆が夜這いをやったりして女性を探して自分の生涯の伴侶にしたと云う様な事もあります。しかし良い面を私は申しました。その地域社会に於ける青少年達がどれほど自発的に貢献したかと云う一つの例を申したのであります。そう云う意味で皆様方がこの4日にわたるセミナーで21世紀をになう若い人々の為に何か良い事を会得して頂きたい。もっと話したいのですが時間がまいりましたので、このへんで終ります。御静聴有難うございました。



経営し、適正価格で取引きをなし、顧客との間に物と金銭とを交換するに当って、お互に相手の身になって感謝と満足とを交換し心のパイプをつなぎ、お互に心の潤いをうるような取引をします。従業員、下請け、同業者等の関係においても同様であります。税金も当然の国民の義務として正しく納めます。人から非難されるような不純なことは決してしないという自信から胸を張って企業経営を行うことができ、自分の企業が栄えるということが、他を不幸にしたり同業者に圧迫を加えることもなく、他も共に栄えることを意味します。このような考の下に我々は自己の職業を天職というわけであります。

又ロータリーとは利己と利他とを調和せしむるところの人生の哲学である、とも申します。人間は誰でも自分の幸せを築くためになるべく多くの利益を得ようという執着心を持っております。従って実業の現場においては、利己と利他との調和とは申せ、これを実行に移すという事は至難の業であります。然しロータリアンは例会活動を通じて心の境地が段々段々高まって来ますと、その彼方に自分と他人を超越するところの第3の媒体或る種の概念上の実体を心に宿すことが出来て、利己と利他とを調和させることができるようになるのであります。この第3の媒体のことを初期ロータリーで今日の販売学を開発しました。哲学者であるフレデリック・シェルドンは Cosmic Consciousness 天地の理法と申しました。

天地の理法とは、神様のようなもので境地が高まり自分の心の実像の中に神が宿れば、その程度に応じて利己と利他との調和を理想に近いような形で行なうことができ、その反射的な効果として地域社会万般を潤すようになるのであります。この天地の理法の認識を目的とする例会活動によって得た自己改善のことをロータリーでは Service 奉仕と呼ぶのであります。そしてこの奉仕の心をもって家庭生活、社会生活、職場生活、国際的生活の場で実践することを奉仕の実践と申し、我々ロータリアンは、この奉仕の心を高めながら四六時中奉仕の実践に励げまなければならないのです。

シェルドンは "職業の学問とは奉仕の学問なり" "奉仕に徹するものに最大の利益あり" と申したのであります。即ち奉仕の心をもって正しい経営することによって信用という大きな功徳が与えられこれに支えられて、好、不況にかかわらず企業は長期的に安定した利潤をあげができるのであります。"企業は人、人は心" といわれるのもこのことであります。

このように考えますと、ロータリーの奉仕はあくまで誠心的であり、個人的であります、団体的奉仕もやらない訳ではありませんが、ロータリーの原則から申しますと例外的なもので、その目的はロータリアンの奉仕の心を育て、一般社会の人々の公聴心を助長せしむる一実習例と見るのであります。

宗教家は神や仏と相対して修行につとめ悟りを開き衆生済度をされますが、我々は世俗の世界にあって奉仕の心、思いやりの心=ロータリー精神を磨きあげ、世のため、人のために又社会改善のため、国際理解、親善と平和のためにお役に立つ人間になろうと日夜努めている同志であります。

従って我々人間は有縁無縁の関係なく、それを超越して神の摂理によって目には見えないが見る目をもってながめれば明かに看ることができる紐 Solidarity によって結び付けられているんだとの自覚の下、自分の幸せのみを考えることなく世界の何処に一つの不幸せがあっても、自分の倫理的責任と感じ、何とかお役に立ちたいという気持を持ち続け、例えばバングラデイッシュでは一夜明けると 3000 人の餓死者が出る、そして若い人達が仕事もなくプラプラしているということを聞けば自分のことのように心を痛め何とかお役に立ちたいと思う人々これが眞のロータリアンの姿であります。

このように申して参りますとロータリークラブの例会は大変硬苦しいものだと思われるかもしれません、決してそうではありません。ロータリアンは例会に参加するときには、世俗の論理を切断し、……つまり大企業、中小企業金持ち、貧乏人、大学卒、中卒といった社会的地位や名声等を全て忘れて、童心に帰って入って来てお互に裸の付き合いをする訳ですから非常に楽しい会合になるであります。そこから初めて親睦、友愛の心が育って参ります。

かって先輩ロータリアンは「ロータリーの例会は銭湯だ。一週間の奉仕の疲れとよごれを洗い流すために集まって来るのである。ここではみんな裸になって語り合うのだ」といわれたことがあります。みな平等の立場に立って楽しく語り合い、ロータリーは“人の上に人を作らず、人の下に人を作らず”ともいわれる所以はここにあります。この親睦の中から全ての人々に対する思いやりの心、人間愛が生まれて來るのであります。

ロータリーは 1905 年にシカゴ市にできましたが、その後ロータリーと同じような目的をもって 1912 年にエックスチェンジクラブ、1915 年クラブ、1917 年ライオンズクラブ、1922 年トレムカクラブ（これは Y M C

A の下部組織でバイブルを元にして青少年育成のために組織され、1930年に  
ワイズメンズ・クラブと名を改め昭和3年に日本に入って来ております。)  
その他オブチニスト、その女性版のソロブチニスト等々の社交団体ができて  
おります。

本館の前に“人と出会い、神と交わり、愛の灯のともるところ”と刻み込まれた記念碑がありますが、この言葉に私は深い感銘を受けました。それはロータリーのめざすところを簡明直だんに表現されており、これこそロータリーの本体だからです。

今日皆さんは四国、兵庫県から集まってこられ初めて出会われた方々が多い  
と思います。皆さんは各界でリーダーシップをお持ちの方々です。ロータリー  
は皆さんに一つの鍵を差し上げたいと思います。その鍵で胸衿を開いて話し合  
って頂き自己研鑽に努めて頂きたいのです。これがRYLAの目的であります。  
短い期間ではありますが、ここで育てられた友情を大切に、そして今井先生を  
初めカウンセラーの方々、講師の先生方のお話を聞き見聞を広め神と交わり愛  
の火を燃し続けて下さい。1962年国際ロータリー会長に就任されたラハリー  
氏（インド）は“Kindle the Spark Within” “心の中に灯を”  
“Discover Yourself” “自身を発見せよ”と申されました。

どうか皆さん、これからの方の人生にここで学んだ心をお忘れなく、明るい  
どんな人に対しても人間として与えられた生命の尊さ人格の尊厳は全く平等で  
あるという広い視野に立って人々に接し、若い人達をリードして頂きたいので  
す。今日は小豆島ロータリークラブの皆さんにお忙しい中を皆さんをお迎えする  
ために沢山出て来て下さいました。これも奉仕の実践の一例です。実践の發  
現形態はいろいろあります。しかしロータリーでは現象にとらわれないで本質  
でものを見ます。物事の良い面をみて、前向きに行けば世の中は明るくなるの  
です。これがロータリーの愛の精神なのです。人間はこのようなやり方でしか  
正しく生きる道はないと思います。

人皆に美しき種あり、そして貴方だけしか持たない力を一人一人神から与え  
られているのです。その力を使わずに過すことは神の摂理に反します。  
人間は、必ず社会的責任を果たさなければなりません。虚偽虚飾の心を捨てて  
心を清らかに悔のない人生をお送り下さい。

## R Y L Aについて

深川純一

ロータリーの青少年指導者養成計画には3つの方式があります。先ず第1に、R Y L Aは、今から20年前の1959年オーストラリア及びニュージランドにおいて開発された青少年指導者養成計画であります。この計画のオリジナルな方式では、受講対象を18才から24才までの青年男女に限っておりまます。但し、今回のこのR Y L Aでは、セミナーのレベルを高めるため、受講対象を20才以上とし、しかも上限を定めておりません。

第2に、「指導者キャンプ」という方式があります。これは、R Y L Aより更に10年早く、1948年に米国カリフォルニア、ミシガン及びペンシルベニアの各州の数地区で開発された計画であります。R Y L Aと異なる点は、高校年令の男子のみを参加の対象としていることであります。

第3に、「ロータリーと学生との会議」という方式があります。これは、学生活動家と既存体制派のロータリアンとの間の相互理解を深める必要があるとの意見に応えて、米国カリフォルニアで開発された計画であり、これによってお互いの考え方を率直かつ自由に論じ合い、両者の間に意思疎通を図ろうとするものであります。ロータリアンと学生が半数ずつ合計42名がこの会議に参加するという方式であります。

以上の3つの方式は、いずれも一定期間のセミナーないし会議の形態をとるものであります。若い人々の中にある指導者としての素質と、善良な市民としての責任感を啓発することを目的としているものであります。

このほかにも、ロータリーには、青少年とのかかわりあいにおいて、ローターアクトクラブとインター・アクトクラブというものがあります。ロータリークラブと同じ様にクラブの形態をとっているところが、セミナー形態をとっている先程の3つの方式と異なるところであります。

ローターアクトクラブは、1968年に国際ロータリー理事会が提案したものであって、18才から28才までの青年男女をもって組織され、その目標はロータリーと全く同じであります。

インターラクトクラブは、1962年やはり国際ロータリー理事会が提案したものであって、高校生の男女をもって組織されているところがローターアクトクラブと異なる点であります。

ところで、ロータリーが企画したこれらの計画や組織は、いずれも原理的には心を育てることをその眼目としているものであります。

これは、ロータリー自体が、心を育てることをもって奉仕の本体と考えていることの現われであります。即ち、ロータリークラブの例会は、個々のロータリアンが自己研鑽にはげむところ、お互いが自分の至らざるところは他人をもって補い、他人の至らざるところは自分をもって補い合う所謂切磋琢磨にはげむところ、このようにして所謂良質な思考を育て合って行くところ、と考えられております。「ロータリーの例会は人生の道場である」という言葉は、この点をえたものであります。したがって、ロータリーにおいては、そのクラブがどういうロータリアンを育てたかが重要なのであり、そのクラブがどれだけ金を寄付したかは重要でないであります。そして、このようにして育てられた心、良質な思考は、やがてロータリアンの家庭、職場を通じ、地域社会更には国際社会へと伝わり、その結果社会全体が明るくなつて行くだろうということをロータリーは期待しているのであります。ロータリーのこのような伝統的な思考の長い歴史の過程において、やがてロータリーは、自分達の思考を自分達の内部だけにとどめず、自分達の次の世代、未来の社会を担う青少年達にも及ぼそうと考えるようになります。そこで、心を育てる方法として、ロータリーと同じくクラブの形態をとったのがローターアクトクラブ、インターラクトクラブであり、セミナーの形態をとったのがRYLA、指導者キャンプ等であります。

さて、私はここで、ローターアクトの会員達もロータリアンと同じく、常に心に問題意識をもっているということについて、一つの話を紹介したいと思います。それは、私が或るロータリーの理論研究会で聞いた話であります。

南九州のローターアクトの指導者研究会でロータリーが水俣ローターアクトクラブの若い会員から質疑を受ける機会がありました。

彼は次のような悩みを訴えたのであります。「自分は現在、公害病で有名な窒素の会社に就職し、自分に割り振られた仕事はボイラーマンである。真面目な社員だということで、ローターアクトクラブが出来たときにその会員にさせ

てもらったが、そこでは、ロータリーは倫理的な企業管理を行い、それを通じて企業内部はもとより、地域社会に対しても迷惑をかけてはならないというのをロータリーの奉仕の実践であるということを指導者から教えられ、ために自分は悩んでいる。

自分がボイラーとして会社に忠実にボイラーを焚けば、その限りにおいて公害の発生原因が怒濤のように有明海に流れ、公害病患者が激増する。自分はロータリーの奉仕の尊さを知った以上は、窒素の会社を退職し、地域社会に迷惑をかけない職種に転職すべき倫理的な義務があるのだろうか。だがしかしオイルショック後の不況のため、自分が新しい職種に転職することはおそらく不可能であるし、もし仮りに、転職先のあてもなく退職したとすれば、自分の親兄弟が路頭に迷うことになる。にも拘わらず、自分はロータリーの奉仕に忠実であるがために、窒素の会社を退職すべき倫理的な義務があるのだろうか？」と。これに対するロータリーの回答は、

「あなたは、ロータリーの奉仕の考え方を理解したるが故に窒素の会社を退職する必要は毛頭ない。自分の職業に忠実にどんどんボイラーを焚くべきである。たとえ、それが地域社会の人達に迷惑をかけることになっても。ただしかし、あなたはローター・アウト・クラブに入会し、ロータリーの奉仕の真髓を原理的に理解するに至った。あなたは、今は末端のボイラーマンであるが、やがて主任になり、課長になり、部長になり遂には取締役になるかも知れない。そこで、あなたが会社の組織構造の中で段々と管理職に上って行く過程の中で、いつしか因縁が熟して、自分の管理権限の中に入ってきた場合には、自分は窒素の会社の管理運営を通じて、社会の人達に公害病を発生させることはあるまいぞ、あるまいぞ、と自分に言いきかせながら、今、ボイラーを一生懸命に焚きなさい。」と。

人間の力には限りがあります。解決しようとしても直ちに解決できない問題は沢山あります。しかし、出来得る範囲内において少しでも倫理的な部分を多くして行く。いつもその心をもって、問題意識をもって一生懸命解決に努力する。にも拘わらず、自分の生涯の間に解決できない場合には、次の世代にその解決を託す。このような心をいつも持ち続け、努力を続けるということが、いつかは地域社会を明るく美しくして行くであろう。というのがロータリーの基本的な考え方であります。このようなロータリーの期待は、ローター・アクトの場合

に限らず、R Y L A についても指導者キャンプについても同じであります。今日ここにお集りの皆さん方が、このセミナーによって、それぞれ心に何かを得て地域社会へ帰って行く。その心は、やがて皆さんの家庭や職場、或は皆さんのグループを通じて地域社会へ伝わって行くであろう、ということを期待しているのであります。

ところで、今回のこの R Y L A は、一般の指導者養成セミナーと違って、世界的な高い視野から青少年問題を考えて頂くという、かなり高いレベルのものとして企画されております。したがって、受講能力等を考慮して、オーストラリアで開発されたオリジナルな方式とは異り、受講者の年令を20才以上としあかも上限を定めておりません。したがって、皆さん方の中には、かなり年令差があります。また、皆さん方の中には、既にボーイスカウト、ガールスカウトその他のグループでリーダーとしての経験のある人もありますが、まだリーダーの経験のない人もあります。

また、学生、教師、実業人等その生活環境もそれぞれまちまちであります。したがって、受講能力や感受性についても個人差があります。しかし、各人各様の程度、能力に応じて学び、心に何かを得て頂ければよいと思うのであります。特に、リーダーとしての経験を積み、色々な技術的なことは全て修得してしまっている人達は、このセミナーによって更に高い境地に達して頂ければと思います。また、未だリーダーの経験のない人達は、将来リーダーシップをとられる時のために、このセミナーによって、より一層青少年問題に対する理解を深めて頂きたいと思うのであります。

このセミナーの4日間、よき友と出会い、ロータリアンと共に互いに心を高め合い、育て合い、そして地域社会へ帰って頂く。そのことによって、やがて社会がより明るくなつて行くであろう、そういう願いをこめて、この R Y L A セミナーを企画したということを一つ覚えておいて頂きたいと思うのであります。

## ライラについて

山村 徳太郎

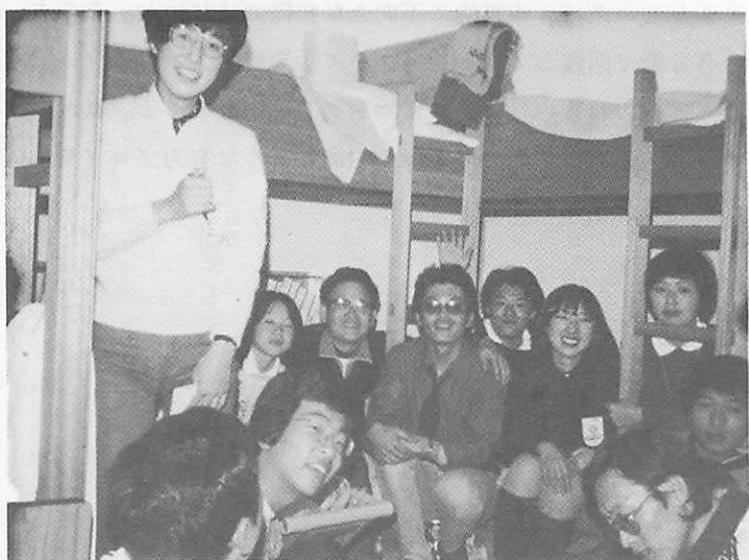
ロータリーの数ある青少年プログラムのうちで、ライラはロータリーの実態に合った良いものだと思う。これは、なんとかうまく育てて、将来有力なプログラムに持っていくべきではないか。R I の中央事務局が推奨してよこす各種のメニューの中には、正直いって、うんざりさせられるようなものが少くない。しかし、それらの中なかにあって、ライラの発想は比較的素性の良いほうであろう。

ところで、ロータリーの青少年活動を大別すると、直接関与の方式と間接関与の方式との二つになる。ローターアクト、インターラクトなどは前者に属しライラは後者の部類に入る。私は、ロータリーが青少年問題に直接手を染めるということについては、くれぐれも慎重にと考えている一人である。

私も長らく青少年活動をやってきて、その体験からいうのだが、青少年の問題は、それにかかわるおとなが文字通り全身全霊を打ち込んで行なうべきものだと思う。そうして始めて、どうにかなしとげられるたぐいの、たいへんむずかしい問題である。片手間にやるといった安易な取り組みは禁物であろう。

このように考えていくと、ロータリーは、青少年問題に直接かかわるには、どちらかといえば、本質的に不向きな組織ではないか。その点、現に青少年活動の各分野で活躍しているリーダーに手を借りし、さらに高い境地を得させるというライラのねらいは、まさにロータリー向きである。私が、ライラを将来、ロータリーの青少年活動の主軸を占めるような有力プログラムに育てあげるべきだという理由はここにある。

# バズセッションより —問題点・話しあいのポイント抜粹—



### <ロータリークラブについて>

良識者の集団、4つのテストの奉仕団体、一人一業、公平と奉仕の団体、専門職業人の団体 … などからエリートの集団、一般人とは無関係の金持ちの団体、知名度が低い … などの批判も厳しい。

### <ライラについて>

来てよかったです、ライラセミナーこそ、最もロータリーの精神を表わしている。この出会いのスパランさに感激、ロータリアンと話ができるよかったです。青少年リーダーとしてとても有益だった。みんな一人一人への配慮に感激した。 … など、しかし、連絡が充分でなかった。PRが足りない。来年はどうなるのかなどの批判も聞かれた。

### <青少年リーダーとして>

リーダーは上下関係ではない、何でも受け入れる心の中が大切、違った意見を交換する場作り、現実と理想のギャップを埋める役割などを学んだ。他団体の良さが解った。奉仕の厳しさ、リーダー意識、グループワークの重要性、主観的ではいけない。リーダーの役割り、他人の助け手になる難しさ、などが話された。

### <リーダーの人間性とは?>

#### <これからリーダーは?>

- ・ 上下関係ぬき（子供との）がいいのか。
- ・ 前に出るリーダー、後で力もちのリーダーについて
- ・ スーパースターリーダーはだめで、これからはメンバーの長短所をひき出していけるリーダー、さめてみるリーダーが必要。
- ・ メンバーがリーダーをつくっていく。意図的にメンバーに踊らされる位のさめた目が必要。生きざまをメンバーにみせる。
- ・ うけ皿を広くもち、色々のものを積極的にとり入れる。
- ・ リーダーはうごくな。役割分担の意味がなくなる。
- ・ 自分に合った仕事をえらぼう。

＜メンバーについて＞

- ・ 人数減が最大の悩み。
- ・ 人数は増えるが、それをどうしたら維持できるか。

＜ボランティアについて＞

- ・ 義務でない。
- ・ 広めにくい。
- ・ リーダー自身、自分の活動をどれだけ理解できているか。

＜その他話し合ったこと。＞

グループの理解が深まった。他の団体のリーダーと話しあった。会員を継続させる方法、出すぎるリーダーをどうするか、弱い会員を助ける。

福祉の問題と奉仕活動のあり方など、リーダーとしての反省と具体的に直面している問題に対する反応が強かった。



# 閉会のとき

この会議は開かれてから、もう二ヶ月が経つ。この間、多くの意見が交わされ、問題が解決され、新しい取り組みが実現された。

しかし、この会議は、まだ終わっていない。今後も、この会議の精神を守り、意見を出し合い、問題を解決していくことが求められる。そのためには、各々の意見を尊重し、他の意見に耳を傾け、話し合って決めることが大切だ。



## 育てよう！ 心の花園を

梶 浦 瞳 一

いよいよ楽しかったライラキャンプもみなさんと別れる時が来ました。この短かい期間ではありましたが、何か皆さん的心に永遠に残るもののが出来たと私は考えています。

それは皆さんの心の中に愛の灯がともったこと、一つの心の中に一つの花園ができたと思います。その花園に皆さんのお好きな花を一生かかって育てていただきたい希望でいっぱいです。本当にこのキャンプを催すことが出来ましたのは執行ガバナー、或いは今井先生、深川先生多くの方々のおかげです。皆さんのおかげで人生が開けたような 私自身もそんな気持で一杯です。自然に囲まれた環境の中ですこやかな数日を過ごしたことは、皆さんと共にいつまでも忘れる事ができません。私の家の電話番号は、33-4980 サーサヨクヤレ松山局です。私はいつでもいます。家は皆さんのがんばりにいつでも解放します。松山に来られた時は道後温泉に泊らずにいつでも私のところに来て下さい。この会をご縁に皆さん同志、私達同志兄弟だという事を忘れずにいて下さい。来年もしこのキャンプが開かれましたら又やあと挨拶を交わしましょう。道で会った時も声をかけて下さい。

総てのものに愛をわかつあおう！

執 行 孝 脇

昨年の4月、我々がガバナー・ノミニーの時インターナショナル・アッセンブリーがフロリダ州で開かれました。全世界の380名近いガバナー・ノミニーと奥さん達が集って来ました。その時言葉は通じません。だが人間だという善意の集りだということが言葉以外のものを与えてくれました。その時私は、皆なに宇宙船地球号のオーナーは誰だと問題を提起しました。“人間だ！” “神だ！” いろんな意見が出ました。“だったら問題提起した君は誰だ？” と一人が尋ねました。「森羅万象です。」と私は答えました。そこにころがっている石も宇宙船地球号のオーナーの一員ではないか。それらに皆、愛をわかつあおう！生きているものだけではなく無生物にも愛をわかつあおうじゃないかと私は話しました。このライラで何か君達は得たと思います。

又逢いましょう！ 来年も逢える事を楽しみにしています。

一隅でも明かるく  
～小さなあかりの群れが世界をつくる～

今 井 鎮 雄

最初に今度のセミナーで私達が考えた事について、もう一度申し上げて、そして皆さんがあなたについてよく考えていただけたらよいと思います。昨日からロータリーの少年少女キャンプが始まりました。開会式にはガバナーのご挨拶から始まって、子ども達にキャンプ生活をするに当っての注意を詳細に説明しキャンプ生活に入りました。今朝も参りましたら食事の前に歌をうたっていました。ところが昨日はじめて集った子ども達なので、歌がよく判らない。リーダーやカウンセラーが皆前に出て、歌ったり踊ったり、キャンプソングの指導をしております。一緒になって段々手をたたくのも出て来ましたが、まだまだ自分でするというよりはやらされているといった態度であります。ガバナーの先生方に、「実はあの子ども達がもう2日たったら、自分達が次はあれを歌おう、これを歌おうと言って、自分達が前に出て、沢山のカウンセラーは全部後に下ってしまいます。歌の指導は一人のリーダーがおれば、あとは子ども達自身が次から次とグループを楽しくやっていけるのです。」というお話をしました。

ところがこのセミナーでは、始めに私が申しましたように、もう既に色々なグループでリーダーシップを取っている諸君達に、その上に立って新しいグループの指導者になっていただく為の知識であるとか、心構えであるとか、色々な事を考えて頂きたいと思います。そのために一切のプログラムの最低限の規則しか皆さんに申しませんでした。所長にも生活面で大事なことだけ注意して欲しいと頼みました。火の始末以外は一切皆さんのが自由にして頂いたらよい。これは或る意味において不親切かも知れなかったのですが、時間の使い方にしても、皆さんの自制を期待しました。色々な評判が私にも聞えてきます。私自身責任者としてそれらの事を気にしつつ、皆さん方に責任をおまかせて3日間やってきました。皆さんは戸惑われたでしょうが、さすが立派な、夫々の所で見識をもち、色々なものを考えて集まって来てくれた皆さんです。夫々に馴れてアジャストして下さり、立派なセミナーを終っていただいた事を心から

感謝申しあげたいと思います。特にカウンセラーのロータリアンの方々には心からお礼を申し上げなければなりません。RYLAをなぜこのように忙がしい年度末の決算期にするのだとお叱りを受けましたが、色々な事情を考えて決行したわけです。例えばカウンセラーの橋本さんにここに来る前にお約束しました。「決算の3月31日にはお帰り頂いて結構です。後はもう青年諸君達ですから何とかやってくれると思います。」と。ところが橋本さんは皆さんと一緒にやっている間に「もうとも帰れん！帰ったら会社が倒産しているかもしれませんけど、最後迄がんばろう！」といって実は残って頂いたのです。他用があったのを、こちらの方が楽しいから1日延ばすのとは違うのです。少なくとも会社の責任者として考えた時、決算の31日に帰らなかったという事は、皆さんへの愛情をもって大きな決断をして下さったわけです。岩瀬さんにもそうです。皆さんそういう形で加わっていただいたという事について心からお礼を申し上げたいと思います。こういう方々と出合ったということは一つの大きな契機だと思います。皆さんからロータリーについて痛烈な批判を受けました。これも私はもっともだと思います。ロータリークラブが大きくなつて来ると、ガバナーを始めとして、こんなロータリーにしたいと願っていても、大勢の中には「まあよろしいが…」と言われる人も居るだろう。一生懸命している人がもし少数であったとしたら「何だロータリーはカッコイイ事は言うけれどもあんまりなにもしないじゃないか！」ということになる。けれども橋本さんとか岩瀬さんとかを見ると、成程ロータリーは一生懸命やっている。皆さんと出合いたかったんだという事を判っていただきたい。若い諸君達に出合い、私達の気持を伝え、後に続く者として、本当に一生懸命やって頂きたいとお願いをしたいと言う気持を判って頂けたらと思うのであります。そのような出会いをこの場所で作ったということが、もう一つの私達の大仕事であったということを覚えておいて頂きたいと思います。

その次に私は講師の先生方を考えました。田中先生が来て下さるお気持はあったけれども、どうしても都合がつかなくなり、私のピンチヒッターでやむを得ず場ふさぎをした形になり「羊頭をかけて狗肉を売った」といわれても仕方がないと申訳なくお詫びをいたします。しかし、後の二人の先生方にとって忙がしい中をわざわざ来て下さり、一見、吉本興業にいった方がよいのではないかと思うほど、面白い話しをしてくださいました。しかし皆さんに或る種の

方向を与えてもらおうと私はお願いしておりましたし皆さんも又何か得て下さった事と思います。私達が余暇とか、リクリエーションとか考えた時に、それが単なる方法ではなく、広い視野にたっていろんな問題を考えようじゃないか私達の生きる方向の問題なんだという事を考えてもらいたいと思います。武田先生の講演にしても、漫才のように笑ってばかりいた中で、子どもを扱うことの本当の意味を皆さんに考えて頂きたい。実は青少年の指導者ということは技術のみではないのだ。もっと深い意味を持ちながら私達が技術を使うのだということを覚えて頂きたいと思います。人間が育つということの本当の意味は何かということを考えて頂きたい。私達はそういう形でこのセミナーをやりました。そのような目的が達せられたかどうかは、これは皆さん方によって夫々の判断があるだろうと思います。唯よその指導者養成講習会とは違った形の講習会を皆さんに受けられたことを覚えて頂きたい。最後に一つの話をしたい。

アーネスト・ゴードンというスコットランドの或る大学のキャプテンをしている人がおります。もう60才を一つ二つ過ぎた年令であります。このアーネスト・ゴードンという人は、前の世界大戦中に日本軍の捕虜になりました。マレー半島をずっと追いつめられ、彼はビルマのシャングルの中の日本軍の捕虜に入れられました。彼はその収容所の経験を書いて、スルー・ザ・リバー・クワイ「クワイ河を通って」という本を出しています。これをみると、捕虜収容所に入れられた人達は、食べものが充分ありませんから出来るだけ自分がこっそりと他の人よりも余計に食事をとりたい。なるべく他の人より労働を減らして、体力を残し、自分が最後に生き残る為に、人の足を引っ張ったり、或る時は人を押しのけて食べものを得るような生活が続いていました。捕虜収容所というのは、全く動物としての人間が生きているような世界であったと彼は書いています。そんな中でもう1週間とは生きないだろうという病気になった一人の兵隊がいました。もう食物を自分で取りに行くことも出来なくなりました。「俺はもう少ししか生きる事が出来ない。あと少ししか生きられないならどうして生きたら本当の人間として生きれるだろうか」彼はそのように考えました。

「そうだ。皆が一番嫌がる仕事を自分はしよう。」一番嫌がる仕事というものは何か。ウミにまみれた包帯、臭くてたまらないものを洗うことを誰もが嫌っていました。「自分は重労働は出来ないけれども、あの包帯を洗う仕事をやろう」彼は違うようにしてベットから転げ落ち、バケツにウミの包帯を入れてク

ワイ河のほとりまで出掛けていって腹這いになりながら水をくみ、包帯を洗い又這うようにして戻って自分のテントの奥に乾かして「誰でも包帯のいる人はこれを使って下さい。汚なくなった包帯はここに入れて下さい。」1週間後に彼は死んだのです。ところが、彼のしていた小さなことを誰ともなく口にしました時に、自分本位で生きていたその収容所の中で人の為に何かしたという男の話がボツンボツンと伝わって、皆が何か心の中に灯がともったようになったのです。それから数日後、日本の兵隊に連れられて彼等は作業に行きました。もう日本は負け始めていましたので、収容所の兵隊がなるべく減ってくれた方がよい。要するに死んでくれた方が食糧事情が助かる。彼等は大変きびしく述べをさせ、何か手落ちがあると片端から処刑していました。大変残念ですが、手記にはそう書いてあります。そうして或る時は50人の兵隊が作業をして終りにスコップを1人づつおいてゆきました。日本の兵隊がそこのスコップを数えましたところが49本しかない。カンカンになった日本兵は「誰が失くしたか前に出ろ！」収容所にいる捕虜のイギリス兵は、前に出たらたちどころにその場で殺される事を皆知っていました。青くなつてジッと立っているのみ、皆心の中で「誰かなくした者が出てくれればいい — 」と思いながら — 。ところが誰も出ない。段々怒った日本兵は、最後にこう言いました。「誰も責任をとらないのならば、連帯責任だ。お前等皆を処刑する。」その時、1人の男が「すみません。私がなくしました。」と申し出ました。「何故今まで言わなかつたか」と言ったかと思うと、その銃を逆さにかまえて、台座で彼の頭をぶんぬぐった。勿論彼は即死であります。ところが、後で日本の兵隊がもう一度数えたら、49本だと思ったのが50本あった。日本兵が数え間違えたということです。ところがその話が収容所の中に拡がると「あいつは自分が失くしたんじゃない。俺達の命を救うために自分が申し出た」そういう事を言い始めた時、今まで人の足を引っぱって、なるべく樂をして1日でも他の人よりも長く生きようという兵隊達の中に「そうじゃないんだ。人間の社会というものはお互いが自分の利益を中心に足を引っぱり合ってたらいけないので。そのような社会の中で人の事も考える人がいる時に、初めて人間の社会が生まれるんだ。動物としての人間の集りのような捕虜収容所の中で、人間としての社会が生まれるのだ。」と言うことが段々わかって来た時に、その収容所の中は、ホノボノとした暖かさにつつまれてきました。やがてその捕虜収容所を閉じられて、捕虜達

は貨車につめられ逃げて行きます。或る小さな町で止っている時、後から負傷した日本の兵隊達が送られて来て貨車が遇った時、「水をくれ。苦しい！」とみじめな日本兵は口々に叫びました。それを見たイギリスの兵隊達は、自分の水筒と自分の薬、或いはその包帯をもって自分の貨車から出、向うの線路にいる日本の兵隊の所に近づいて行きました。番をしていた日本兵は「寄るな！」と騒いだそうですが、彼等は黙ってそのそばにいきました。銃をかまえた兵隊達も持っているのが水筒であり、包帯であるのに気がついて、黙って道をあけました。そして彼等は水筒を与えました。その時…… その英語で書かれた本の中に Thankyou という言葉を英語ではなく、ローマ字で Sankyu と日本の兵隊達が言ったと……。

私達の平和はそこから、そして私達の世界も又そこから開けてくるのだと私は思っています。

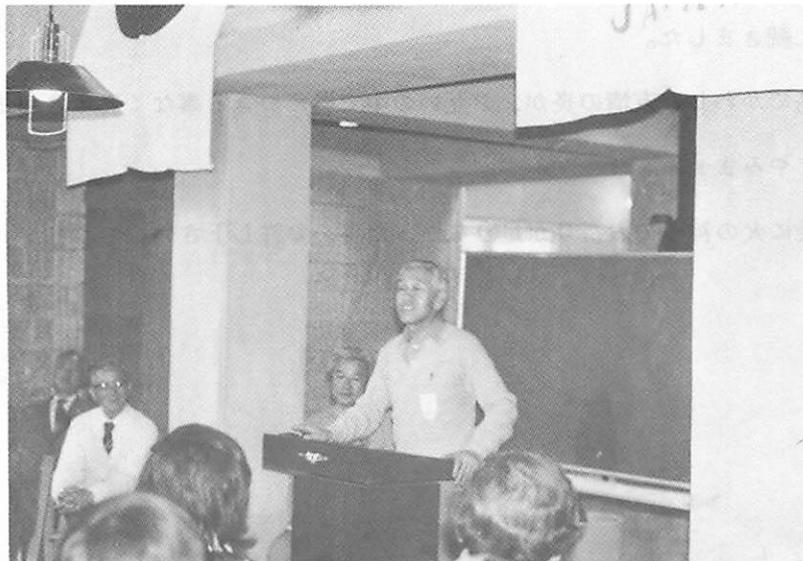
ボランティアとはどういう事なのか、諸君達とは、私達とはどういうことなのか。ロータリーとはどういうことなのか。青少年指導者とはどういうことなのか。

みんなが自分のためにしか生きられない世の中に、人のために自分の時間をさいてでも生きようじゃないかと考える人達の群れが集ってそこにはじめて私達の世界があるのです。昨日、執行ガバナーがあの小さなマッチを自分で照らして皆に自分のマッチを照らしてみようとおっしゃいました。みんなのマッチは夫々小さかったけれども、それによって皆の顔が明るく照らされているのを見ました。そのことが僕達の仕事なのです！ 僕達が照らすのは、大きな松明でも何でもない。本当に小さなマッチのような火であるかもしれません、そのことによって、この世界を明るくしていくような仕事をすることを若い諸君達にお願いしたいと思ってこのセミナーを持ったことを覚えておいていただきたい。したがってこのセミナーは単なる指導者講習会ではなく、ロータリアンと出会ったことも覚え、ロータリアンをおおいに批判していただいたら有難い。そしてこういったことを機会にロータリアンも、本当のロータリーの精神にのっとったロータリアンが沢山ふえたらよいと思います。又皆さんも、皆さんの出来るボランティアの仕事をして下さるならば、私達が今生きている世界を少しでも明るいものとしていくためにお互いに協力していくのではないかと思います。

私はそういう意味をもって、Dean という役目をもってここに来たという事を最後に申し上げておきます。そしてこの島で皆んなで出会い、仲良くしていただいて夫々に色々な思いをもってここから帰っていただくことを心から感謝していることを申しあげて、私のご挨拶にいたします。

本当にみんな有難う！。

またどこかで出合うときに、お互同志仲良く話し合っていただけたらと思います。



## 燃やそう友情の炎を

### ～高木さんからのメッセージ～

急用のため、ほころびかけた島の桜になごりを惜しみつつ、皆さんへのご挨拶もせず離島しましたことは、申しわけなく思っています。

30日夜のキャンプファイアは思いもよらぬ台風なみの春の嵐、風速30m、全国で死者 15 者、怪我人 159名という事を知りびっくりしました。

こうした中で皆さんと共に囲んだファイアは強風を受けながらも消える事なく燃え継きました。

余島でかわした友情の炎が、お互いの中で燃えつきる事なく燃えさかる事を祈ってやみません。

最後に火の神へのお祈りが足りなかった事をお許し下さい。



## 心に灯った火を大切に

深川純一

あっという間に過ぎた4日間でした。

私はスバラシイ RYLA が出来たと思っています。皆さんからも本当にいろんな事を教えていただきましたし、今井先生、両ガバナーからもいろいろ勉強させていただき本当に有難く思っています。正直言いまして昨年12月以来、はたしてどうなる事かと思いながら始めた RYLA でしたが、こういうスバラシイ成果を得られましたのは皆さんのおかげ、大自然のおかげ、総てのもののおかげと思っています。

改めて心からお礼申しあげます。

運営面、心の面、いろんな面がありますが、両ガバナー、今井先生は勿論、カウンセラーの皆さん、事務局の皆さん、ここの所長さん、職員の方、本当に心のこもったご指導、ご準備があってこそと思います。

私はこのセミナーで私自身も心に火をともしたと思っています。皆さん方も何か、心に火をともされた事と思います。それは友情の火かもしれないし、奉仕の火かもしれません。この小さな輪をだんだん時間をかけて大きくしていくことを祈ってやみません。

又いつかお逢い出来る日を楽しみにしています。来年も又、おそらく開催されると思います。

又来て下さい。

皆さんお元気で！

なく時間に追いたてられることもない。コールしなくともその時間5分前には集まつてくる。次第にその意識が一人から二人、二人から三人と、高まって全体に伝わっていく。一つの大きな流れとなっていくことの素晴らしさ。さすが選ばれた受講生だと、心秘かに至上の喜びにひたる。こうした自主的な行動がプログラムの進行をより効果的にならしめたことは言うまでもない。

2日目、30日、夜はキャンプファイヤーである。私はその責の一端を担っていた。午後からは合宿の雨、それに多少の風さえ加わってきた。畜生と思わず口ばしる。勿論雨天に備えての準備はしてあったが、できることなら屋外でやりたいと思っていただけに、思わず神に祈りを捧げる気持になった。愛の火の燃えるところ、人との出会い、神と交わり、の碑文の前に佇む。雨が風にかわる。濡れた地面を案じながら D E A N 今井先生を始めスタッフの方々のご意向に従い、今宵のキャンプファイヤーは決行することにした。小高い丘の上に、こんもりと茂った木立がファイヤー場を取囲んでいる。やがて静かに夜のとぼりが余島全島を包み始めた。それとは対照的に木々の葉音がオーケストラを奏でる。研修生が黙々としてファイヤー場に集まる。声一つしない。ただ聞えるのは風、木々の梢えのざわめきが異様に私たちの心をかきたてる。

營火長の入場、ガバナー執行先生、白布に装った營火長が彼方の暗闇から静々と入ってこられる。静肅そのものの一瞬である。あたり一面、黒い肌におおわれた自然の暗幕、その中にあって、くっきりと浮んだ白の装束營火長のお姿は、清潔感と重々しさを我々の胸に刻みつけられた。やがて營火長より点火の合図が、おごそかに夜のしづまりを破って告げられる。風は次第に強さを増す。

天地におわします火の神よ。こよいわれらに聖なる火をあたえ給え。エールマスターの神への祈りと共に、あらかじめ用意していた電源スイッチが篠原ファイヤーキーパーの手によって押される。かすかに火種にポーと火がつく。然し燃えつかない。アッという間に火種が風に吹きとばされた。何という神のいたずらか、無念残念、しまったと思いながらも、いやあわててはならないと大きく一呼吸して心を静める。もしものことがあればと、予備の松明を用意していた。無言のうちに、点火の失敗ができるだけ早く松明の奉持者に伝えなくてはならない。事前の打合わせはしてあったものの、この時間の長かったこと、まさに千秋のおもいである。やがて彼方の暗闇から松明をかざしたキーパーが入ってきた。安堵の胸を撫でおろす。神へのお祈りが足らなかったのかと猛反

省する。風にあおられて火は勢いよく燃えさかる。夫々の出し物もますますだった。欲を言えば自分たちの周りにあるものをもっと巧みに捉へて粉装をこらす創意と工夫に欠けていたと思う。一枚の毛布に例をとれば、毛布をまとうことにより衣服にもなれば、かぶってしゃがんでいれば、岩にもなる。また二人が中に入って歩けば四足の動物にもなる。要は勇気になりきり、気分を出すことである。出し物のアイディアについても、我々指導者のあとには、幾多の青少年たちがいることを忘れてはならない。

風はますます強まってきた。火の粉を案じられてか営火長が上座から、ソット下手（風下）に回られ、とび散る火の粉に気を配られた営火長の咄嗟のご機転私はその心音にいたく感動させられた。

燃えさかっていた火も次第に小さくなっていく。やがて炎も消えて、煙だけになる。時折強い風にあおられてサッと火の粉がまいあがる。

結びの言葉が、D E A N 今井先生のお口から静かに、静かに、しかも低く力強く流れ始める。皆はいつしか今井先生を中心に、残火を囲んで輪になっていた。「諸君と共に楽しく囲んだこういの火もやがて消え去ることであります。わけても自分の体を焼きつくしながら、この強風下にもめげず、我々に光と熱を与えてくれた尊い薪の奉仕の姿を忘れるることはできない。ここ余島での出会い、共に囲んだキャンプファイヤー、数々のおもいでを残しながら、いままさに消えようとする炎、それは、私たち一人一人の胸の中に、心の火として永しえに燃えさかることであります。」火の後始末を入念にして、感謝の祈りを捧げながらファイヤー場をあとにする。

D E A N 今井先生の結びの言葉が、いやという程、心の底にやきつく。本当に素晴らしいキャンプファイヤーだった。自惚れだろうか。それにつけても篠原ファイヤーキーパーのお手並には恐れ入りました。心から敬意を表したい。先生の多年のご経験と英智があり強い風を物ともせず、火を守りつけた、それは執念の火であったとも思われる。

火はサーヴァントであり、マスターでもある。この言葉が一層、しみじみと思い出されてならない。余島でのお互い創り出したこの炎が、いつかは、世界の隅々まで、皆の手によって広がっていくことを念じてやまない。

## 「素晴らしいヤング・メン」

Aグループカウンセラー

篠原慶弘  
(姫路RC)

春たけなわといっても、瀬戸の小島の春はまだ寒い、しかし桜の枝々には今開くかと、もう蕾が紅い。

第1回、267、268地区合同、ライラセミナーに、一抹の不安をもって集った青年達は次々と島に上陸して来た。

このセミナーのカウンセラーをおおせつかって、21人の若者と3泊4日の共同生活が今始まろうとしている。始めて会う青年達との出会いは、この桜の下で始まった。「この桜の花、このセミナーの終る日まで咲くだろうか。」「咲く」「咲かない」、「じゃあ、カケよう」、にぎやかな談笑のうちに、グループは固まつた。ペアは往年のベテラン、カウンセラー嘉納洋さん、今はベテラン奥様は、皆んなのアイドル、断絶の時代を吹き飛ばしての大活躍、日々脱帽、深謝

第1日目、ロータリークラブとは、どんな会ですか、など、いくらか堅苦しい雰囲気だったが、夜の二次会では、みんなさすがは青少年活動のリーダー、この島のキャンプ施設のすばらしさに論議の花が咲く、リーダーとしての問題が次々と飛び出して来る。夜も更ける頃、若者は一つに打ち解け、友情の火は燃え、お互の心を照し始める。「手を差しのべよう」「今年のR I ターゲットに、若者はお互いに共鳴し、このライラセミナーの意図をハッキリとくんでいってくれた。

デイーンの今井氏が仕掛け人であれば、若者達一人一人も、それに応えてくれた。両地区ガバナー、講師、委員のみんなが、この島での出会いの喜びを分ちあうことことができた。あっけない程早く、3日間は終り、やがて島を去る日が来た。春の嵐そのままの深い感銘の幕が閉じる日、誰かが叫んだ、『咲いた、咲いてる、桜が咲いた』参加者の心にも深い充足と感謝の花が咲きこぼれた。余島は今、春、夏の余島で又会おう。キット会おう。尽きぬ名残りをもって島を去る帰りの車中でラジオが、サア立ち上がりヤングメン！君も元気出せよヤングメン！スバラシイY・M・C・Aと叫んでいた。

A グループカウンセラー

嘉 納 洋

瞬く間に過ぎてしまったセミナーから幾週間がたちました。それぞれの地域でそれぞれの役割を元気で果たしていらっしゃいますか？

今回、何年振りかでカウンセラーを仰せつかり、しかも立派に成人なさった方達の御相手等、とても、と思案しつつ、暗中模索の内に大好きな余島に出掛けた私ですが、皆様の御世話どころか、"人との出会い"の大切さ通り逆に様々な事を学び、会得させて頂き感謝の気持で一杯です。大人の方々の御相手ですから、付かず離れずの接し方をして来た3泊4日でしたが、果たしてこのやり方が少しでも御役に立ったかしらと反省もさせられて居ります。

R Y L A の期間中、その直後は興奮さめやらぬ中、あれもこれもの気持で一杯だった事と思います。少し日のたった現在、皆様の心の中は大分整理されていましたのではないでしょうか？ 打ち上げ花火の様に華やかなものでなくていゝ、何か一つ、心に残るものがあれば、どうかそれを大切に心の糧に、灯にしていただければ、初回 R Y L A は大成功だったと思います。私も、みな様から頂いた心の温もりを、いつ迄も大切にして行く積りで居ります。

本当に有難うございました。

「ライラのうた」

A グループカウンセラー

高 島 澄 江

あの日、坂を吹き上げる潮風は、まだ冷めたかった。あの大食堂の灯の下には若者達の声があり、騒音があり、よろこびの叫びがあった。冷めた視線があり、感覚があり、動搖があった。

あの日、揺れていた船着場を渡ってやって来た若者達のうちには、無気力な時代の錯乱があり、叫び切れない叫びが濁み、もつれた青春の迷いがあっただろう。もはや、輝しい意識は沈黙し、人々は無気力をもてあそび、老人達は不定形な世代の緊張に疲れていた。求める夢の形も知らず、与える事の確信もなく、彼等は一つの島で出逢った。

あの島の潮風と雨は、青春の痛みを老人の中に再び呼び醒し、若者は勇敢にも彼の両腕にとび込んだ。ある人は、一つになった影を残して、午後の海へボートを漕ぎ出した。ある人は、小さなインディアン達が駆けた草原に、今は無言で共に腰を下ろした。埋められない世代の谷も、あの島の緑の呪術は、やがて、かたくなな三つの世代を溶かし、白髪と汗たぎらせる新鮮な肉体を一つにし、凝縮し搅拌し、そして透明な風となって天空へと舞い上る。

あれから若者達にどんな日常の時間が流れたことだろう。何処を彷徨うとも、何気なく呼び止められ、一時を遊んだあの島の情を、あなたは呼び戻す事が出来るならば、やがていつの日か、風は再び舞い下りて、雨となり、街や川辺の緑を楽しませてくれるだろう。

## 「素晴らしい出会い」

Bグループカウンセラー

橋本勲  
(伊丹RC)

余島。この島の事を思う時、あのライラセミナーの、あの素晴らしい出会いが今でも昨日の様に思い出されます。私自身の不勉強で、ライラセミナーの事は何も理解しないまま、参加し突然の事とてBグループのカウンセラーとして指名されたのでした。カウンセラーとして右も左も分らないまま3泊4日でしたが、何とか全うできましたのも、今井先生をはじめ諸先生方の指導あったればこそと今思い出しても冷汗ものでした。

さて、今回のセミナーは私にとりましても、素晴らしい経験がありました。Bグループ男子14名、女子8名が共に行動し、ひとつの輪になり、ともに勉強し遊び、夜になればそれぞれのキャビンでの語らいは夜の更けるのも忘れさせるほどでした。そこで語り合った人生について、恋愛問題、教育について、リーダーとして問題、仲間づくりの事など日頃自分達がそれぞれの立場で思い、考えている事を、お互いにぶつけ合いました。それはいつしか、お互いが信じ合い認め合うことの出来る素晴らしい友情にと発展していったのです。私は、このセミナーに参加したひとりのロータリアンとして、このセミナーが成功したと云っていただけのなら、それは参加してくれた青年達の情熱があったればこそと真に思っているのです。

今私は、今回のセミナーを静かにふり返ってみて参加してくれた若者ひとりひとりがそれぞれの地域で仲間づくりの核になって活動してくれる事を心から期待したいと思います。そして最後に参加してくれた若者達の将来に幸多かれと心から祈りたい思います。

#### Bグループカウンセラー

前田 美智子

第1回のライラセミナーに加わった人達全てが声を揃えて、「素晴らしい」「楽しかった」。「とても得るもの多かった」。「大成功だった」と叫びました。そして皆が感謝の心を持ちました。あの計画をたてたロータリアンは参加者の真剣な態度と熱意に、そして若い青年達はロータリアンの真心と好意に。

一体この成功の秘決は何だったのでしょう。先づ参加者の年令も幅が広く、普段話し合う事の出来ない年令の人達同志の出会いがありました。職業、学校、家庭環境、地域性、趣味、思考等全く異った人々の集まりでした。全く異った思考を持った人との出会いがありました。生活の悩みを持っている人、全く違った社会にいる人との出会い。未知の分野の人と接する意外性、このドラマティックな出会い。誰もが他の人の話し合いに感動し、新しい知識を得て目をみはりました。そして自分の立場を見つめ直し、新しい意欲に燃えました。そして多くの友を得ました。そしてこの素晴らしい出会いと話し合いの機会を演出したロータリークラブの人々の好意、彼等のほとんどの方々が、こう云うプログラムに対しては未経験でした。でも彼等には絶大なる好意と善意、そして自己を犠牲にした熱意がありました。又陰の部分で大きく援助された無数の善意。そしてもう一つ、あの清らかで美しい余島が舞台だったのです。あの島では必ず何かが起ります。美しい心、梶原ガバナーの御言葉を借りれば(良質なる思考)が目ばえます。絵の様に美しく点在する島を見はるかして透明に輝く海、白い砂浜、新緑の木々と愛らしい小鳥のさえずり、多勢の人々の好意に支えられて作られた夢の島です。

こう考えますと、好意で始まり、善意に満ちあふれ、そして好意に終ったライラセミナーでした。ライラセミナーを成功させた唯一の要因はこれに尽きると思います。この素晴らしい計画をされたロータリークラブに敬意を表し参加の機会を与えて頂いた事に感謝いたします。

## Cグループカウンセラー

林 真 紀

なつかしい皆様、お元気でお仕事に又ボランティア活動にがんばっておられることと存じます。余島へ行きたい一心でどういうものか、はっきりわからないままカウンセラーという大役をお受けいたしましたが、ライラにご一緒させていただいて、たくさんの勉強が出来たこと本当によかったです。

特に、Cグループでは、メンバーが一人ふえたという感じで岩瀬さんに大変ご苦労をおかけしてしまいました。15年間も家庭にとじこもりとくに外の世界へ目を向けようとしなかった私にとり、年輩のロータリアンの方々又若い方々との交わりに心洗われた日々でした。世の中をななめにみるひねくれた中年になろうとしていた私に、人間のすばらしさを改めて教えていただけました。物の見方、考え方があまりも二まわりも大きくなつたという実感がえられました。

つね日頃、ロータリーの理想と現実のずれに冷やかな目を向けていましたがライラはロータリーの理想そのものだったと思いました。あんな素晴らしい方がロータリーに入ってられたという驚きで一杯です。素晴らしいロータリアンを人生の目標にして生きていかなければと心に強く思いました。

「ロータリーの友」誌上でライラは参加したものでないとその素晴らしさがわからないということが書かれていますが、本当にその通りで、あの時生まれた素晴らしい心と心の交わりは、参加者にとって一生忘れることが出来ないだろうと思いました。純粋なもの、美しいもの、正しいものを求めて生きていこうすると挫折することの多い世の中で、世の一隅を照らす一本のマッチになること、そのすばらしさに気がついたセミナーでした。

ライラの開催の為、たくさんの方々がご奉仕下さいましたこと感謝し、皆様と再会する時を楽しみにして居ります。

## 「ライラに参加して」

B グループカウンセラー

岩瀬 弘昌  
(小豆島RC)

ロータリー青少年指導者セミナーの願望が筋書き通り開花されるであろうか。青少年集会への参加訓練経験の簿い私にはお恥しいことながら自信の無いままにライラへの参加をさせて戴きました。

両地区初めてのライラに、カウンセラーとしての大役を仰せつかり、参加者がグループ別に編成されて「Cキャビンのカウンセラー」が私に与えられた役割で、心暖まる御奉仕にあたられたカウンセラーの神戸市須磨の林真紀さんと共に貴重な勉強をさせて戴きました。

3泊4日の間、青年達と寝食を共にし、彼等の思考と行動に触れる機会に恵まれ、ロータリアンとして「相手の身になって、友愛を以って、他人の手助けをする」ことの意義を噛み締めながら、私自身行動の中に奉仕の感激を味うことが出来ました。私のグループの青年達は、市町村の社会教育指導者、学校、幼稚園の先生、大学生、青年団活動の会長や団長、企業の人事担当者等、年令も20才から32才迄の様々な青少年グループを代表する両地区からのリーダーで、男子15名、女子6名の21名が共々に自己研鑽したメンバーでした。

初対面の青年達の表情がほぐれはじめたのが第一日目の炉辺会合からで、彼等には何かを求める意欲と気迫が漲り、講師の先生方の講話内容、リーダーの立場からの諸問題、ローターアクトやロータリに関する卒直な意見等、お互いの日常の努力や経験をわかつ合う対話に熱中し、年令のギャップもお互いが忘れて時が流れてしまい、カウンセラーとしての役目の重要さを痛感させて戴きました。

彼等は若い、そして持味の純粹さが建設的な意見が飛び出すふん囲気を彼等自身が作り、友愛の輪は日毎に燃え上りました。

フィナーレのキャビン最後の会合では、青年達各々が持てる個性が存分に発揮され、ライラで得たものを大切にしあらための人生訓まで語り合える友情が芽生えるなど地域社会に貢献することの意義を確かめ合い、心と心が結び合えたことが何よりの成果で御座居ました。そして、ライラCキャビンの唄が出来上がるなど、明日を担う青年リーダー達の満足感が漂う素晴らしい一刻でした。加えて、突如、執行ガバナーがかけつけて戴き、感激の場が最高調に展界され、彼等は「有難うロータリー」「有難うガバナー」「有難うカウンセラー」と全員の唱和がはじまり、感激と思い

やりの心を全身で表現する現代青年達の特徴の一端に触れることが出来ました。私が嬉しく感じたことは「ライラはロータリーが運営するのだから、他の諸会合と違っていた」と語る青年達の満足感のある言葉を耳にしたことでした。

各キャビン毎に植樹したオリーブの苗木も時代と共に大きく育ちゆく事と思いますが、ライラで得た数々の体験を自分たちのものとして、広い視野を持つ心豊かな大きな指導者として活躍されることを願い、感動を体験した余島での再会を彼等と約しました。

余島から離島の際船着場で、Cキャビン全員が語句を並べるサイン入りのTシャツをプレゼントされ、思いも寄らぬ贈物に目頭を熱くしてしまい、良き青年リーダー達から心暖まる大切なものを教えて戴きました。

青年達は感受性が強く、外見的な感動の様子をそのまま評価することは本質をとらえていないと云われがちですが、青年達が行動しやすい路線を整していく配慮こそ必要なことだと感じました。今回のライラには見事にこの点が生かされて、プログラムの開花がなされたこと、大変うれしく思います。

意義あるライラに御尽力賜わりました両地区のライラ特別委員会の皆様方、梶浦執行両地区ガバナーはじめ、委員長の深川、宮崎両先生、そして神戸西ロータリークラブの今井先生には献身的な奉仕をしめされ、色々と貴重な御指導を戴きまして心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

## ～参加者感想文より～

- 素晴らしい企画を有難うございました。心の勉強をさせて頂きましたが、最も印象深いものは、初対面の人々の集まりのグループが僅か一夜にして心が通じ合えたと云う事です。都會では出来ない事と思います。矢張り今井先生を始め諸先生方の真心、若い人々の熱意、そしてこの自然豊かな地のなせる業だと思います。“人との出会い”神と交わり、愛の火の燃える処」と云う事を御話して頂いた時は、心が浄化された様に、そして胸にはのぼのとしたぬくもりを覚えました。又各ガバナーの御話し、キャビン毎でのカウンセラーの方の受動的な優しさを沢山頂きました。この暖かい思いをさめさせぬ様、そして出来れば私のわざかなぬくもりもプラスして、職場に家庭に届けたい気持で一杯です。
- 学校、子供、家庭等真剣に考えれば考える程、多くの悩みがあり「何とかしなければ…」と思いながら日に日に自己の視野の狭くなっていく事を感じていましたが、この4日間での創り出されて来た人との触れ合いの中で、すっかりそうした悩みを忘れてしまいました。これは R Y L A が、一人一人の価値感を問い合わせ正そうと云う気持で一杯だった事、改めて広い視野に誘ってくれた事、そして皆が真剣に見つめ、考え、共に活動しようとした結果得られた尊い体験だったと思います。唯一 不安に思い、こうなっては絶対にいけないと思う事は、余島を出て現実のある地域に戻った時、時が過ぎればこの R Y L A の体験を忘れたり思い出の一コマにしてしまう事です。私達はこれから各々の場で各々の人々と互いに考え方や友情を深め一人一人の持っている問題を皆で解決していく為に、今回得た体験を土台にして輪を広めて行きたいと思います。
- ボランティア活動をしていて、現実の社会はなぜこうも理解がないのだ、分ってくれないのだと、まさしく理想と現実のギャップにぶち当ってどうしようもない腹立たしさに、やめてしまおうかと思っている時、 R Y L A に参加する話しがありました。少々気の重い事でしたが、心の霧を晴らす光が見つかるかも知れないと、一寸の期待にかけて見る事にしました。果たして霧は晴れたか残念ながら急にそんな気分になれない事は否めませんでした。しかし静かに冥

想にふける時、私の生き甲斐を、愛の芽を自らの手でつもうとしているのでは、と思えてきました。講師の方々、皆さんの意見を唯々感嘆の思いで聞き、奉仕の根本的なあり方を考える時、自分の心の狭さを思い知り、恥かしいと思いました。そして私に未だ愛の残火が消えずにあったのだと気がつきました。この火を絶やす事なく細々と燃やし続ける事、それが結局未熟な私の自己確立に連なるのでしょうか。この機会に巡り会えた幸運に感謝します。

- 講師の自信に満ちたしかも世界的視野に立って、自分自身に与えられたニーズを十分に把握する力を、講演を受け手の自分がどれだけ咀嚼出来得たか、基本的な咀嚼力のなさを痛烈に感じました。さまざまな不安材料が揃う中で裸の心でサークルに帰り、この1年無我無中で基礎学習を学び、体で実践して又第2回のライラセミナーに参加出来る資格を得る事が今後の生き甲斐であり、救いでもあります。出来の悪い私にもう一度、出て来いと来年も声をかけて下さい。
- セミナー全体に流れていたものは、指導者としての根底の“何か”を考えると云うものだったと思います。物の見方、考え方の難しさを痛感しました。結局私にとって今回の研修会は具体的な成果にはつながらなかった様です。しかし、講演を聞き、素晴らしい仲間と出会えて何か熱いを感じました。“他の人”はしっかりした素晴らしい考え方を持っている、とも感じました。地域へ帰って何か一步踏み出せそうです。何かは未だつかめません、しかしそれはこれからじっくり考える問題です。
- R Y L A では、今迄経験した研修とは一味異った、人間としての勉強が出来た様に思う。子供達と接するリーダーとして活動に必要な理論、技術の修得は勿論大切だが、それだけではいけない、将来一人の社会人として生きて行く上で今回の様な経験も合せて積まねばならない事が分って、とても大きな意義があったと思う。
- 今熱くなっているこの心を何かの型にしたい…。すぐには役立てる事は出来ないだろうけれど、この気持を保ち続けたいと思います。

- 郷土の異う人間同志が笑い、そして泣いた！何て素晴らしいんだろう。多くの友を得て帰るだけでも十分なのにロータリアン諸氏の心暖まるお話しを頭と体で習得した。僕の二三年の年月の中で何にも勝る宝になると感じる。これから地域社会へ戻って一步前進した立場でこのセミナーを考える事から始まると思う。そして青年団へ帰りより多くの友に伝えてやりたい。誰にでも聞かせてやりたい、否聞かせなければならない。日頃遠くに感じるロータリアンを身近に接触が出来、年代の差で話しくそうに感じたが全くそれはなかった。生涯の大きな支えとなると同時に、自分の殻を破る事が出来た。ひとまわり自分が大きくなった様な気がして、これから先きのモヤモヤがなくなった、と云う事は自信が出来たのだろう。セミナーを終えて帰ってもいつ迄も友を大切にし、ロータリアンとの繋がりをいつ迄も保ち続け第1回ライラセミナー修了生として恥じない行動を積極的な活動をくり広げて行きたいと思う。
- 同じ志を持っている人が、こんなに大勢いて各々一生懸命なのを知り、一段と勇気が沸いて来ました。現実の色々な悩みや問題にふり回されている僕を自分に戻し生きる方向を指し示してくれました。めったに泣いた事のない僕ですが、余島を出る時は涙が出来てしまいそうです。どうも有難うございました。
- 若者が居、歌があり、喜びがあり、語らいがあり、涙があり、友情が溢き、そして別れのある余島、キャンプファイアで燃やした心の炎の輪を拡げ、いつ迄も燃やしつづけよう。そしてライラよ永遠に！
- 大変なごやかに過ごさせて頂き有難うございました。素晴らしいゼミでした。自分なりに数多く考えさせられる処のある意味深い4日間でした。各スタッフ、先生方の気持の良いマナーと30m sec と云う烈風下の仲間との出会いの炎、浜辺に間断なく繰り返される波の音、"トベラの実"の発見、それら全てを自分なりに今後リーダーとしてより積極的に、もっともっと大切に思い返して頑張ります。

## 地域の向上

- 様々な地域から来た、様々な考えを持った多くの人々に接し、如何に自分の住んでいる地域周辺の事が分っていないかと云う事でした。  
神崎から來た人が居ましたが、大阪と兵庫の境の川と勘違いしたりしました。もう少し自分の住む周辺の事を深く知らねばと痛感し、自分達の市や町をより良くし、良い意味での知名度を上げて行かねばとも考えさせられました。
- 色々な青年団体の状況を知り、ロータリーの、研修生の皆様から数多くの意見、素晴らしい理論を聞き、今後歩むべき青年団の方向を少し得られた事をうれしく思って居ります。今後地元ロータリーの方々と一緒に地域社会建設のために努力したいと思います。地にはれ、人にはれ、仕事にはれ、と云われた言葉、忘れません。

## 自由の中で考える

- 今迄はびっしり組まれたプログラムの中で研修を受ける機会の多かった私ですが、ゆったりしたプログラム、それでいて自分達に指針を与え考えさせてくれたプログラム、良かった、本当に良かった。
- ゆとりあるスケジュールの中で自分の今迄の考え方を更に向上させ、しっかり自分のものにした事を確信します。
- 時間的に余り規制されておらず個人の自主制に仕されていて、伸び伸びと自由に出来て大変よかったです。

## 奉仕に関して

- とかく技術の練磨等に走ったり、真に奉仕する事の理想を見失ってしまい勝ちで、行きづまりを感じる昨今でしたが、今回のセミナーにより最も求めてやまなかつた心の持ち方と云うものの指針を見つけた様です。
- このセミナーに参加して、これ迄自分の持っていた“奉仕”に対する考えが変わりました。奉仕をする時間がない、暇がないと半ばあきらめ気味でしたが

時間を作り出そうとする心、これだけでも“心の奉仕”“精神的な奉仕”と云うものがあるのだと、帰って皆に“奉仕の心”を分ってもらえる様に話したいと思います。

- “心の奉仕”と云ってもむつかしいものだと思いますが、心の片隅にいつも置き、私は生活して行きたいと思います。
- 若者達が出来る事は世界の中に山程あるのにいざ何をとなると自分の力の無さを知らされる事が多かったけれど、今回色々なお話を聞いて、自分は大きな背伸びをしていたんだと思いました。今出来なくても、出来る時に、出来る事をする、心の中で奉仕の精神を持つだけでも素晴らしいと思いました。各方面でそれぞれの人が一生懸命頑張っている、意見を交わす、ドキドキする程の活気、何と素晴らしい4日間だったかと思います。一色にしか塗られていなかつた私の頭が四色位にはなったかしら、二色だった自分の心が十色にもなった様な、そんな経験をさせて頂き本当に有難うございました。もっとカラフルな人間になりたいと思いました。ロータリーの方々が素晴らしいベンキ屋さんになります様に。

## 自己紹介より

現在、塾の教師をしているが、この4月から教職課程をとるために大学へ通うことになっている。できれば大学院へ進みたいので、試験準備中、趣味は音楽（ジャズ、クラシック）を聞くこと。作詞、作曲、ギター、スポーツ（硬式テニス、サッカー、野球）将棋。

## 伊丹ローターアクト会員

### 第1回ライラセミナーについての感想

今回のセミナーの成果については、多くの人が参加できてよかったですという感想を述べられると思うので、ここでは講演の内容についての感想を書くことにします。まず今井氏の講演について。社会の動きとして、第3世界の国力の増大と第1世界の国力の衰退の傾向にあるということであったが、そこで考えたこと

は、その間にはさまたった第2世界のひとつである日本の立場としては、両世界に対しどういう働きかけをすべきかということであった。（国際親善の意味で）また青少年の実体として、青少年が自分は何をすべきか、何をしたらよいのかわからなくなってきた問題は、今までにも本で読んだりしたことがあるのだが、青少年のもつエネルギーをどういうふうに正しい方向に導いたらよいかというのが教育の課題のひとつであるように思う。次に池田氏の講演について。まず最初に思ったことは、はたして余暇の増大は人間に幸福をもたらすものであるかというとそれは疑問であるということである。それは人生における仕事と余暇のもつ生きがいの働きと相互関係の問題だと思うのだが、増大していく余暇をいかに過ごすかという問題を考えていくのもだいじだが、むしろ主となるのは、いかに多くの人々が創造的な仕事をして生きがいを見出すかにあると思うのだが。以上、両氏の講演を聞いて、青年の立場として、興味深かったし内容のあるものであると感じた。

### 注文、疑問

- 夜の研修時間帯をもっと自由（又グループ）討議にして欲しかった。
- ゆとりあるプログラム、自然環境、講演内容と細部にまで神経を届かせたプログラムにかかわらず、技術交換、活動内容交換と云う事項に関しては、あと一歩その配慮が希薄だった様でとても残念です。
- ゆったりしたプログラムは成功だったか否か。
- 今回のライラは、きびしさ、つらさ（制限）が不足していたのは節のない竹と同じにならないかと不安も感じました。

### ロータリー

- ロータリーの4つのテストが気に入りました。  
1 真実かどうか 2 みんなに公平かどうか 3 好意と友情を深めるか 4 みんなの為になるか。どれを取って見ても日常私達の一挙手一投足に関する事ばかりです。私の信条は、"半ばは人の幸せを半ばは己の幸せを"です。ロータリアンの様に大きな事は出来ませんが一人一人が上記の信条をもって行動すれば今よりもっと暮らし易く住み易くなると思います。

○ ロータリークラブの精神を身近に聞いて、（思いやりの心、奉仕の心）それを帰って今後の活動に役立てて行きたいと痛感しました。又、この精神はキリスト教や仏教等にも相通じる点があると思います。

## 生 活 の 断 片



ロータリー少年少女キャンプ訪問



味もバツグン！  
野外料理



リクリエーション



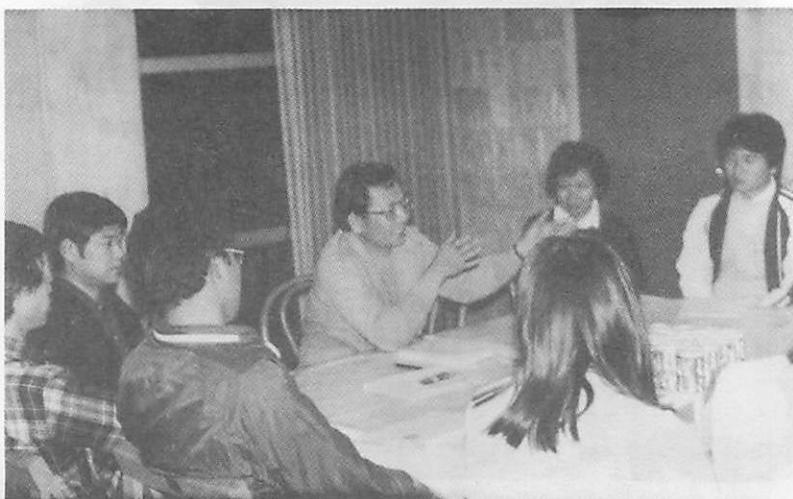
余島は人々に  
若返りの活力を与えます。



ユーモア抜群／楽しい講議



グループ紹介／懇親パーティ



キャビンタイム



ほっと一いき ····



夜のふけるのも忘れて ····

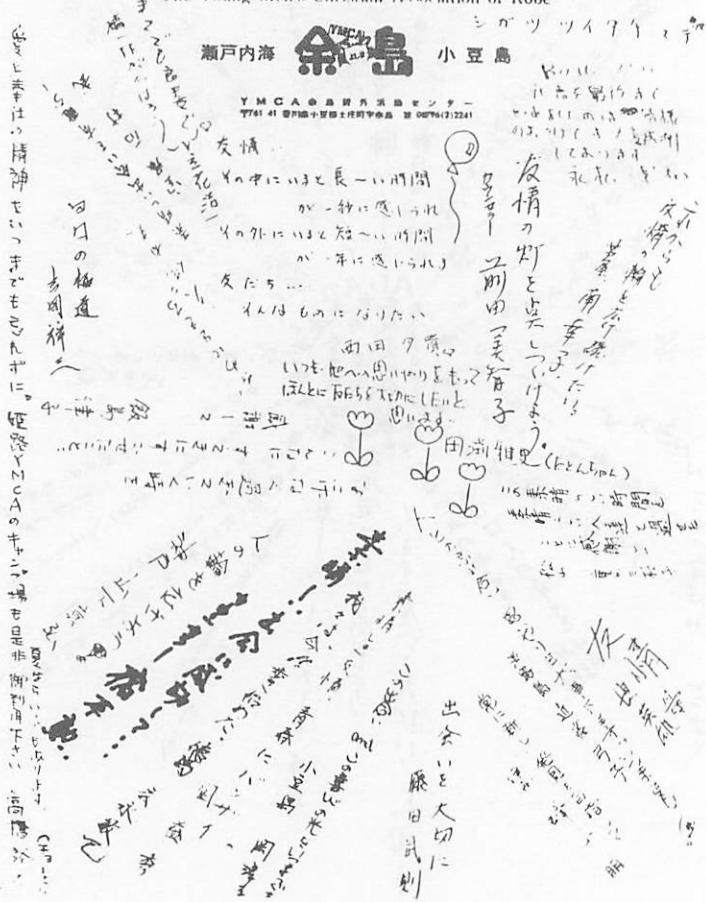


## B グループ

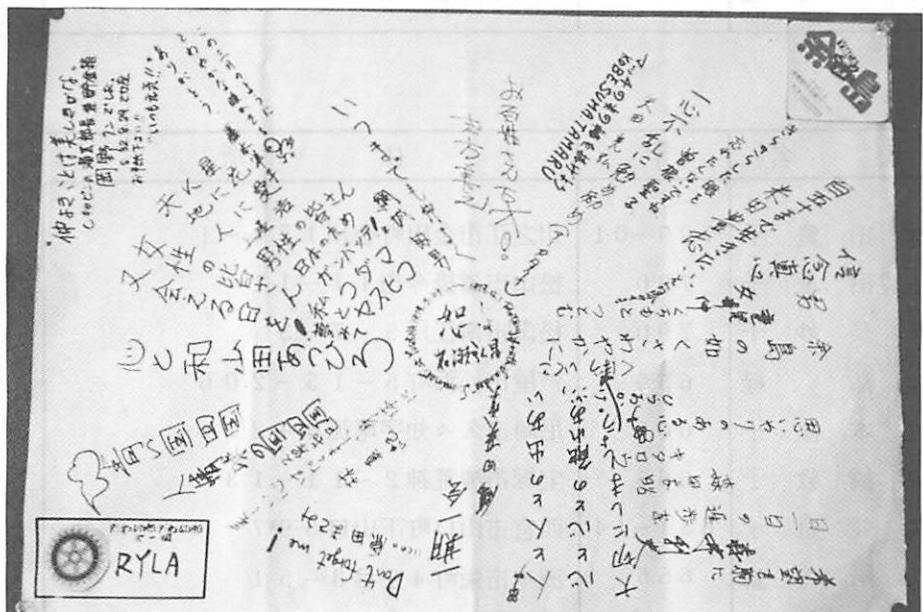


### オーラン RAYLAセミナーに集う素晴らしいBグループ

ノリノ・クリスチヤン・サンクツ・チャーチ・オブ・グラ  
The Young Men's Christian Association of Kobe



## C グ ル 一 プ



## 第1回 ライラセミナー運営委員会

第267地区 ガバナー 梶 浦 瞳 一  
青少年委員長 宮 崎 道 生  
江 藤 一 明  
鴨 田 泰 治  
吉 本 功

第268地区 ガバナー 執 行 孝 崑  
RYLA委員長 深 川 純 一  
今 井 鎮 雄  
高 木 正 徳  
田 中 健 一郎  
山 村 徳 太郎

カウンセラー 岩 瀬 弘 昌 (小豆島)  
篠 原 康 弘 (姫路)  
橋 本 敏 (伊丹)  
嘉 納 洋 (神戸東)  
林 田 真 紀 (須磨)  
前 田 美智子 (垂水)  
高 畠 澄 江 (川之江)

ロータリアン参加者 井 上 昌 俊 (松山西)  
三 原 寿 (北条)  
森 川 昌 一 (高松)  
中 枝 昌 藏 (小豆島)  
塩 本 淳 平 (〃)

他小豆島ロータリー多数

森 五 彦 (神戸東灘)

山 口 知 也 ("")

滝 川 慶 作 (神戸西)

植 松 静 敏 ("")

事務担当 吉村圭子 (R.I第268地区  
ガバナー事務所)  
松原孝子 ("")  
京極美栄子 (神戸西事務局)



昭和 54年 3月29日～4月1日

主 催 R.I 第267地区

R.I 第268地区

ライラ特別委員会

開催地 西日本青少年野外活動センター